

地域を見つめ、地域を動かす

観光まちづくり

第4号

2024

November



國學院大學 観光まちづくり学部

特集

自然の恵みが息づく観光まちづくり

岩手県気仙郡住田町

自然とともに生き人が人を呼ぶ 住田流まちづくり

岐阜県郡上市石徹白地区

“源”の集落で起こり続ける温故知新

nk.



今だからこそ、
大切なこと。

AIやSNSなど科学やテクノロジーは進化し続け、
人や情報が世界中をスピーディに行き交う多様化した社会。
今、大切なことは変化に翻弄されることなく
自分を持つことではないでしょうか。
それは、この国の本質、日本人らしさを見据えること。
これこそが國學院大學の学びです。

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28 國學院大學 総合企画部 広報課 03-5466-0130
<https://www.kokugakuin.ac.jp>

観光まちづくり

第4号

2024

November

國學院大學 観光まちづくり学部

『観光まちづくり』第4号発刊に寄せて

國學院大學観光まちづくり学部長

西村 幸夫

『観光まちづくり』第4号を皆様にお届けいたします。

私たち國學院大學観光まちづくり学部も開設から3年目に入り、最上級生は3年生となりました。2年生から3年生にかけてグループワーク、グループティーチングで取り組んでいる「観光まちづくり演習」も最終ステージまで一連の講義が終了しました。学生諸君が仲間たちと苦労して取り組んでくれた地域の課題解決・魅力向上へ向けた力の入った提案ポスターを一覧して、こうした試みが着実に学生達の身に付いてきていると実感しているところです。

本号の特集のテーマは「自然の恵みが息づく観光まちづくり」です。岩手県気仙郡住田町と岐阜県郡上市石徹白地区の地域に根差した魅力づくりの着実な動きを詳細に紹介しています。住田町も石徹白も、豊かな自然に囲まれ、土地にしっかりと根差した生活をおくる魅力的な人々がいらっしやいます。地元のスギを活かした林業や鉾山の歴史、御師の活動など信仰に根差した古くからの生活など、さまざまな物語が地域を彩っているのです。そうした場所と人の魅力に惹かれて移り住む人も少なくないようです。

こうした魅力ある中山間地の集落とそこで活躍する魅力的な人々は、その気になって見渡すと、この国にはまだまだ数多くあるように感じます。そこには地域に根差した多彩な活動が、魅力的な人々によって進められているのです。そうした地域の応援団としても、私たちは関わっていけるのです。

本号ではまた、おもに海外をフィールドに研究活動を行っている教員4名に登場願い、座談会の模様を紹介しています。いずれの発言も、自分の関心を追究していった先に海外があったということ、まず海外ありきの研究ではなかったという点がとても興味深いです。外国語でのコミュニケーションも、伝えたい内容があれば伝わるものだという感想も参考になると思います。心の中にある境界（ボーダー）を取り払うことが出発点になるのです。そして、海外からの視点を持つことで日本の常識を疑う視点も持つことができるようになります。

本号の幅広い内容の記事から、私たちの目指す「観光まちづくり」の拡がりを実感していただければ幸いです。

地域を見つめ、地域を動かす

観光まちづくり

第4号

2024
November

3 『観光まちづくり』第4号発刊に寄せて

國學院大學観光まちづくり学部長 西村 幸夫

特集 自然の恵みが息づく観光まちづくり

4 岩手県気仙郡住田町

自然とともに生き人が人を呼ぶ住田流まちづくり

12 岐阜県郡上市石徹白地区

“源”の集落で起こり続ける温故知新

第4回「観光まちづくりフォーラム」開催報告

20 第一部 人材育成と地域の発展を目指す観光まちづくり学部のこれから

21 第二部 シンポジウム「地域の暮らしと観光まちづくり」

プレゼンター

井澤 るり子氏 熊本県美里町でのフットパスの取り組み紹介

川口 洋美氏 滋賀県大津市での外国人向け観光ツアーの取り組み紹介

23 吉川 真嗣氏 新潟県村上市の町屋を活かしたまちづくりの取り組み紹介

24 パネルディスカッション

「それぞれの地域が実践する暮らしに根づいた観光まちづくり」

28 第8回～第10回「観光まちづくりカフェ」開催報告

地域連携最前線

30 連携Ⅰ 鳥羽の魅力を発信する「鳥羽うみライブラリー」を開設

31 連携Ⅱ 産官学共同研究プロジェクト始動ー栃木市「蔵の街」を中心に

32 連携Ⅲ 学生目線で丹沢大山エリアの魅力を再発見！

33 「観光まちづくりライブラリー」

34 観光まちづくり学部 専任教員紹介

38 教員座談会

海外での活動は、 心の中にある境界(ボーダー)を取り払うことから

42 研究クローズアップ

「観光宿泊業から見た日本社会の未来」 井門 隆夫教授

地域と歩む博物館

46 Vol.7 秋田県立博物館

48 Vol.8 むろと廃校水族館

50 観光まちづくり学部WEBサイト・観光まちづくり学部X(旧ツイッター)のご案内 観光まちづくり学部GUIDEBOOK 2024 全ページ公開のご案内

表紙の言葉

タイトル“休息をとる古民家”

住田町で人々が集う拠点となっている「まち家世田米駅」(旧菅野家住宅)のリノベーション前の姿を、中庭に立ち止ってスケッチしたものです。現在広場となっている庭には、春の陽光のもと木々が茂っており、その奥で、利活用を前にしばし休息をとっている築100年の古民家は、住田のやさしいおばあちゃん、といったふうでした。

木村 直紀(きむら なおき)
一般社団法人邑サポート理事/
コミュニティデザイナー
(岩手県住田町在住)

愛されて90年 架け替えとなる「昭和橋」

かつて宿場町として栄えた世田米商店街側と、役場などがある川向地区を結んできた「昭和橋」。1933（昭和8）年の架橋以来、長さ73mのこの橋は住民の“生活道”としても親しまれ、川沿いに立ち並ぶ蔵並みと調和し、歴史や古き良きたたずまいを感じさせる景観も形成してきた。

春夏秋冬、朝、昼、晩、いつの季節、どんな時間もどんな天候でも、昭和橋が見せる“表情”は絵になる景色だった。その景観と日常的な利用により地域に愛されてきた昭和橋だが、治水安全性の観点から架け替えられることとなり、2023年には解体工事が完了。2025年度末の新橋完成に向けて、今は工事が進められている。

新たな橋は、どんな表情を見せてくれるのだろうか。旧橋のように地域に愛され、住民をつないでくれることを願いたい。そして、これからの住田の未来を、ずっと見続けてほしい。



昭和橋は桜のピュースポット。新しい橋の完成を桜が見守っている



2022年11月4日の渡り納め会。参加者は感謝の思いをメッセージにして橋に記した

「住田の魅力は、観光ではなく人です。住田に来てくれた人を連れて行くのは、自分たちで橋を直していたり、地

※1 まち家世田米駅
明治時代から昭和30年代にかけて建設された家屋や蔵などを活用、昔ながらのたたずまいを残したレストランやコミュニティカフェ、交流スペース、まち家体験スペースを配置。開設以降、小学生から高齢者のまで幅広い世代の住民が訪れ、にぎわいを創出している。

住田町まちづくり年表	
1888年	市町村制施行により、「気仙郡」から世田米村、上有住村、下有住村の3村が独立
1933年	世田米に昭和橋架橋
1955年	世田米、下有住、上有住が合併して「住田町」となる
1966年	滝観洞で「洞窟開き」
2009年	ケセンロックフェスティバル開催
2011年	東日本大震災発生。住田町内3カ所に応急仮設住宅建設
2014年	木造の役場新庁舎が完成 一般社団法人邑サポート設立
2015年	一般社団法人SUMICA設立
2016年	住民交流拠点施設「まち家世田米駅」整備
2018年	木造の大船渡消防署住田分署が完成。関係人口創出事業を開始
2020年	町内の仮設住宅から全員が退去
2021年	木造の上有住地区公民館が完成。WDLと連携協定締結
2022年	昭和橋が渡り納めに。解体工事もスタート
2023年	仮設住宅跡地に「仕事と学び複合施設」（イコウェルすみた）が完成
2024年	滝観洞観光センターがリニューアルオープン

少子高齢化が進行し、年々人口が減少している古里に対して、村上さんは『『消滅していく町』と言われるぐらいのまちだという危機感がある。地元の若者たちが誇りを持てるようなまちにしていかなければ』という思いを持ちながら、まちを次世代へとつなぐためにリーダーシップを発揮している。



震災がきっかけで住田町に移住した植田さん。SUMICAでの活動のほか、関係人口創出の取り組みも展開している

「住田町の魅力の一つは、そこに暮らす地元の人たち」。そう語るのは、自身も震災をきっかけに住田町に移住した植田敦代さん（38）。SUMICAの設立メンバーで、地元民の「熱」に当てられた一人だ。



とともにSUMICAを立ち上げた。住田と関わりのある人や団体を巻き込みながら、地域活性化に向けたイベントを数多く打ち出している。

活動拠点となっているのが、2016年度に整備された住民交流拠点施設・まち家世田米駅※1。明治初期に建設され、昭和中期に増築・改修された「旧菅野家」の構造や部材をできる限り当時のまま残す形とし、レストランやコミュニティカフェ、交流スペース、まちや体験スペース、蔵ギャラリーなどを設置し、公民館としての機能も設けている。

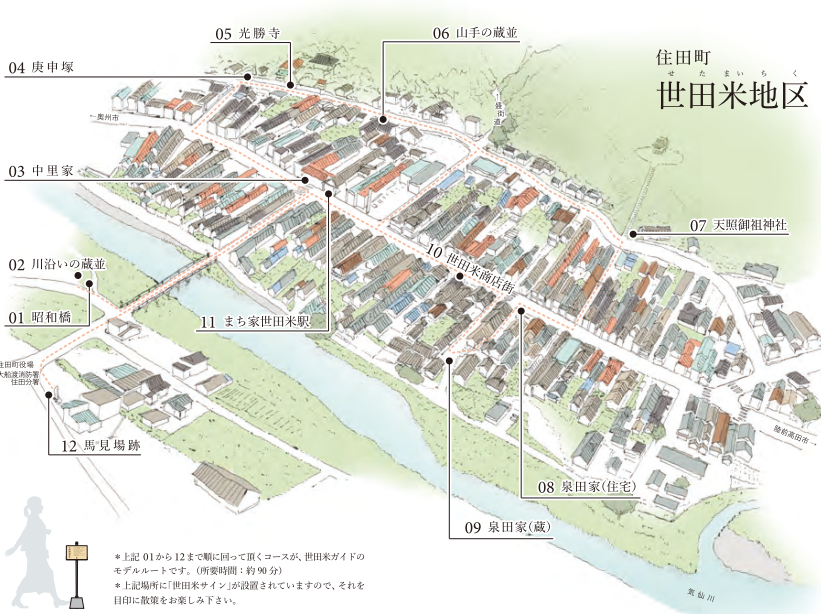


SUMICA代表の村上さん。県内外の人との連携を推進している

元・県立住田高校を卒業後、東京都のデザイン専門学校に進学し、都内で10年間勤務。28歳でＵターンし、家業の塗装業に就いた。

人口5000人に満たない小さな町に外から人が集い、移住してくる。このまちでは、地元民が年代問わず地域を盛り上げるために活動し、その熱意と人の「おもしろさ」に魅了された移住者たちも、地域の一員となってまちづくりへと加わっている。

その代表例が、ジャンルにとらわれず、住田町を盛り上げる活動を展開しようと2015年度に設立された一般社団法人SUMICA（村上健也代表理事）だ。



住田町中心部世田米地区の散策ルート。昔の町屋がきれいに残っている（住田町+世田米ガイドブックより）

自然とともに生き人が人を呼ぶ

住田流 まちづくり

岩手県の南東部にあり、北上高地の南端に位置する住田町。隣接する大船渡市や陸前高田市とともに「気仙地方」と呼ばれる。町の総面積の約90%を森林が占め、公共施設を地元の木材で建設するなど、森林資源を生かした取り組みが行われている。内陸部に位置する住田町は、2011年3月11日に発生した東日本大震災では大きな被害は受けず、被災した両市を後方から支援。ボランティアの活動拠点にもなり、復興支援を通じて全国各地の人々とのつながりが生まれた。その縁から移住者も増え、地元民とともにまちづくりに取り組んでいる。

自然の恵みが息づく
観光まちづくり

岩手県気仙郡住田町



住田町ホームページ



住田町の象徴でもある気仙川沿いの蔵並み

構成・文＝(株)東海新報社
写真＝(株)東海新報社、住田町教育委員会、南雲勝志
イラストマップ＝ナグモデザイン事務所
編集協力＝住田町、SUMICA、邑サポート、
松日橋受益者組合、滝観洞観光センター

「せーの、よいしょー！」。住民たちの威勢の良いかけ声が響く。住田町下有住高瀬^{しもあがり}地内を流れる気仙川に架かる、木製の「松日橋」^{まつひばし}※1。大雨による河川の増水時には部材の損傷を防ぐためにあえて流されるように、ワイヤロープにつながれた長さ11^びの木の板を橋脚に乗せているだけの簡単な造りになっており、流れる度に住民たちが手作業で復元作業を行っている。

このような「流れ橋」は、かつては気仙川流域にも多く見られたが、ほとんど



「森林・林業日本一のまちづくり」を目指す住田町



復旧した橋を歩く金野さん

「せーの、よいしょー！」。住民たちの威勢の良いかけ声が響く。住田町下有住高瀬^{しもあがり}地内を流れる気仙川に架かる、木製の「松日橋」^{まつひばし}※1。大雨による河川の増水時には部材の損傷を防ぐためにあえて流されるように、ワイヤロープにつながれた長さ11^びの木の板を橋脚に乗せているだけの簡単な造りになっており、流れる度に住民たちが手作業で復元作業を行っている。

このように「流れ橋」は、かつては気仙川流域にも多く見られたが、ほとんど



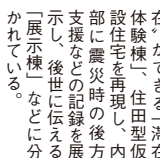
多くの被災者を受け入れた住田町の木造仮設住宅



仮設住宅跡地に建つ、「人材交流の拠点」イコウエルすみた

町が建設した仮設住宅は、従来のプレハブ工法の長屋タイプとは異なり、戸建ての木造タイプ。壁には断熱材を木材で挟んだパネルを使用し、住田の厳しい寒さに応じた工夫を凝ら

全員員の退去をもって町では、同団地跡地に、町外の人材が町内で行うラーニングワーケーションなどの研修や、短・中期間の仕事でリモートワーク、テレワークを行う町内拠点「仕事と学び複合施設」（愛称「イコウエルすみた」）※2を整備。2023年5月のオープン以降、中



1か月以上の滞在者を受け入れているイコウエルすみたの滞在体験棟内部

がコンクリート製などに架け替えられており、残っているのは松日橋だけになった。

地元民が復旧作業に励み、それを見守る町民たちの様子も、地域に根付いた美しい光景だ。観光地と銘打ってはいないものの、住田を代表する景観の一つになっており、町内外にファンも多い。

橋を管理する「松日橋受益者組合」の金野純一さん（80）は、松日橋を「里道」と表現する。「この橋は、地域と地域を結ぶ道路と一緒。道路が崩れたら復旧させるように、松日橋も流れたら直すのが当然のことだ」という。

また、金野さんは「田舎の風情というか、風景の一部だね」と語る。「かつてのよう

かに2人ぐらいいだけ、なくなればさみしい。残していきたいね」と、強い愛着を持つ。

国、県に頼らない 町独自の 仮設住宅の建設

岩手県沿岸部にも甚大な被害をもたらした2011年の東日本大震災。住田町に隣接し、生活圏をとにする大船渡市、陸前高田市が津波で壊滅的な被害を受けた中、住田町は両市の後方支援に尽力した。

代表的な支援として知られているのが、住田町が独自に建設した、「住田型」と呼ばれた木造仮設住宅。町は発災からわずか3日後、「避難所で寒さや恐怖に震える気仙の仲間にくもりを」との思いから、仮設住宅の建設に踏み切った。

※1
松日橋
下有住の中山、松日渡や陸前高田などで被災した人々を受け入れた。仮設住宅完成後は、入居者と町民、各地からの支援者との親睦の場が設けられるなど、地元では被災者も「住田の一員」として迎え入れられた。

※2
イコウエルすみた
ワークスペースとして整備されたオフィス棟、パソコンが可能な「共用棟」、住田を知ってもらうための、お話し滞在ができる「滞在体験棟」、住田型仮設住宅を再現し、内部に震災時の後方支援などの記録を展示し、後世に伝える「展示棟」などに分

域で森を造っていたりする人や、住田で頑張っているおもしろい人たちの所。私もそうでしたが、その人たちと話すとき情熱や意欲、地域に対する思いが心に「ささる」ことが多い」と述懐する。

「不便だけど、その分いろいろと工夫しながら生活するのが楽しいね」と語り、自宅敷地内にサウナ、五右衛門風呂、ツリーハウスなどを自分の手で設置し、自然に囲まれながら生活を送っているのが木工職人・大村圭さん（50）^{※3}。千葉県出身。2013年に住田町世田米に移住し、山あいの地に家族5人で暮らしている。



大村さんの自宅前のツリーハウスでは、自然と一体となって過ごせる

自然と 一体化して暮らす 移住者の木工職人

森に生き、木と暮らす。森に生

にまちづくりに参画している。それが、人が人を呼ぶ。まち・住田のまちづくりだ。



自ら手がけた家具に囲まれながら、古民家で暮らす大村さん

木工の玩具や家具作りを主とした「アトリエトリア」の代表を務め、木工職人として日々さまざまな製品づくりに励む大村さん。自ら改修した古民家で暮らし、自宅の家具も手がけた。

他の移住者と同様、大村さんもまちづくりに参加している。町産材を活用した木製品の開発と商品化、人材育成を通じたまちづくり、人材の掘り起こし、新たな仕事づくりなどを目的に町が2015年度から展開している「木いくプロジェクト」。

※3
WDL
全国各地域の企業や地方自治体向けプロジェクトを手がけている。企業横断による新規事業担当者のコミュニティ運営、複業実践者向けの勉強会も実施し、複業を



人口減少が進む中、若者の定住促進に力を入れた町役場の佐々木さん

町外の複業実践者との交流を促進
町内の若者との交流を促進
少子高齢化に加え、若者の町外流出が人口減少に拍車をかける。希望する仕事

「主役は地域の若者。その活性化が、住田の将来につながるっていく」。佐々木さんは、これから先の住田を見つめている。

「定住」促進にも力を注ぐ。その手段の一つが、関係人口の創出・拡大^{※4}だ。昨年度まで、町役場の担当として定住率向上とその他の関係人口創出などに注力した佐々木淳一さん（53）^{※5}。現建設課長は「若い人たちがやりたいことができる地域にしていきたい」と力説する。

町は、2018年度から関係人口創出事業を展開。その一環として2021年、一般社団法人Work Design Lab（WDL、石川貴志代表理事、東京都）^{※6}との連携協定を締結した。WDLに参加する町外の複業実践者たちと町内の若者が交流することで、従来の考え方に縛られない新たな事業を誕生させたり、既存産業の魅力を掘り起こしたりすることで、若者たちが戻ってきたい、住み続けたいと思えるようなまちを目指している。

※4
関係人口
関係人口創出事業を進めている。住田にゆかりのある県外在住者などを中心に「すみた大好き大使」を委嘱し、住田町ファンづくりを進めている。「地域みらい留学」制度によって住田高校に入学した現役高校生も大使の顔を

※5
住田町の取り組み
2018年度から関係人口創出事業を進めている。住田にゆかりのある県外在住者などを中心に「すみた大好き大使」を委嘱し、住田町ファンづくりを進めている。「地域みらい留学」制度によって住田高校に入学した現役高校生も大使の顔を

※6
WDL
全国各地域の企業や地方自治体向けプロジェクトを手がけている。企業横断による新規事業担当者のコミュニティ運営、複業実践者向けの勉強会も実施し、複業を

※7
関係人口
関係人口創出事業を進めている。住田にゆかりのある県外在住者などを中心に「すみた大好き大使」を委嘱し、住田町ファンづくりを進めている。「地域みらい留学」制度によって住田高校に入学した現役高校生も大使の顔を

※8
関係人口
関係人口創出事業を進めている。住田にゆかりのある県外在住者などを中心に「すみた大好き大使」を委嘱し、住田町ファンづくりを進めている。「地域みらい留学」制度によって住田高校に入学した現役高校生も大使の顔を

※9
関係人口
関係人口創出事業を進めている。住田にゆかりのある県外在住者などを中心に「すみた大好き大使」を委嘱し、住田町ファンづくりを進めている。「地域みらい留学」制度によって住田高校に入学した現役高校生も大使の顔を

**住田たからこぞ
生まれた栗木鉄山の製鉄業**

住田町世田米地内の、静寂に包まれ、凜とした空気が漂う森林の一帯に、その豊かな森林資源を活用して明治〜大正時代にかけて国内有数の製鉄村が形成されていた。その名は、「栗木鉄山」。現代における製鉄業をはじめとした重厚長大産業は、原料や燃料の輸入なくしては成り

住田だからこそ
生まれた栗木鉄山の製鉄業

(明治14) ~ 1920 (大正9) 年に、種山ヶ原に近い世田米子^{せだこ}飼沢^{がさわ}地内で稼働していた民間の製鉄所。最盛期には銃鉄生産量が国内第4位(民間では第3位)を誇り、従業員は五百数十人いたとされる。二つの高炉のほか、職員・工員住宅、郵便局、購買所、学校が設置され、産業にとどまらず生活拠点も形成されていた。

①1908（明治41）年頃の第2回と栗木鉄山全景
②2017年に開催された現地調査の様子
③残存状況調査で、保存状態良好と判明した栗木鉄山第1高炉

立たない。しかし当時の栗木鉄山は、種山周辺で採れた鉄鉱石と、その豊かな森林資源を生かした木炭をエネルギー源として操業した、“住田だからこそ”生まれた産業だった。

栗木鉄山は1881

高炉修理などによって操業の合理化・近代化を進め、国内有数の製鉄所として成長。1914（大正3）年に第一次世界大戦が勃発すると、水沢製錬分工場も含め銑鉄生産は年間2900トに達し、好景気に沸いた。しかし大戦後は不況に陥り、1920年に廃業した。

山間の地形を生かした高炉様式は全国的に見ても珍しく、日本の近代製鉄技術史上においても非常に貴重な遺跡とされている。1997年に町史跡、1999年に県史跡、2021年には国史跡に指定された。

国指定にあたっては、釜石市や福岡県北九州市の八幡での近代製鉄が本格化する前の遺構として重要な遺跡であるとされ、釜石鉱山田中製鉄所以外に大きな民間製鉄所が操業しなかった時代の数少ない製鉄所の遺構としての貴重さと、製鉄所構内の遺構の良好な保存状態が評価

高炉修理などによって操業の合理化・近代化を進め、国内有数の製鉄所として成長。1914

された。

この貴重な史跡をいかに保存・活用していくか。今年7月には有識者らと交えたの保全活用計画等策定委員会も開かれた。町教育委員会では委員からの意見も踏まえて計画の策定を進めている。担当の佐々木喜之次長補佐（50）は「栗木鉄山跡は文化財としての価値も高いが、景観も素晴らしい。近くを流れる川とカラマツの木漏れ日もすてきです。安らげる場もあるので、町内外から多くの人に来ていただき、観光面でも将来的に住



栗木鉄山の保存・活用を熱く語る
佐々木さん



- ①1908(明治41)年頃の第2高炉と栗木鉄山全景
- ②2017年に開催された現地説明会の様子
- ③残存状況調査で、保存状態が良好と判明した栗木鉄山第1高炉跡



観光でも 住田の“核”になる 栗木鉄山

1880年	栗木鉄山操業開始
1908年	第2高炉を増設
1910年	栗木鉄山株式会社創立
1913年	栗木鉄山の鉄鉱生産量が国内第4位（民間第3位）に
1914年	第一次世界大戦勃発
1918年	第2次世界大戦終結
1920年	栗木鉄山事業休止
1997年	町史跡に指定
1999年	県史跡に指定
2002年	国史跡に指定
2021年	国指定史跡栗木鉄山跡保存活用計画等策定委員会発足



1911年に改築した第一高炉



体がまちの特色を発信するシンボリックな役割を担う。

高い耐震性と耐震壁の無い間取りの自由度を実現する、貫(ぬき)式木造ラーメン構造を採用した住田分署

住田の営みと誇りが生み出す
木造の公共施設たち

「森林・林業日本一のまちづくり」を掲げる住田町は、多くの公共施設が木で造られている。

近年は世田米の中心部にある役場庁舎やその向かいの消防署、上有住地区公

高生の自学自習、一般のリモートワークなどで活用されているほか、大学のゼミ合宿、各種セミナーや研修会での利用もある。さまざまなキャリアを持つ社会人を招き、町内の高校生らに多様な働き方を知ってもらい、将来の選択肢を増やす機会も提供している。

町が住田ならではの「人材交流拠点」と位置づけるイコウェルすみた。「静かで集中できる。快適です」と、頻繁に仕事で訪れる町民もおり、町ではさらなる周知と利用促進のため、年3回ほどイベントを開催し、施設のPRと利用促進を図っていく考えだ。

住田町で身の回りにあるものといえば、「木」だ。建築士でもある田畑さんだが、役場では主に「発注者」となる。これまで、町役場の向かいに建ち、全国的にも珍しい木造の消防署などの設計でも公募型プロポーザル※3を企画してきた。

町の中心となる役場新庁舎※4は2014年に完成。それに続いて2018年に整備された大船渡消防署住田分署※5の建築にあたってのプロポー

民館が相次いで整備されてきた。『公共施設といえど鉄筋コンクリート』という不文律により、木材が不遇な時代もあった。もちろん木の切りすぎはよくないが、一番大事なのは、身の回りにあるものを使って建物をつくることではないか。震災をきっかけに住田町に移住し、2015年度から町役場建設課で勤務する田畑耕太郎主査(35)は、木造建築へと思いを巡らせる。

“北の玄関口”
滝観洞観光センター

住田町の誇る観光地・滝観洞。長い年月をかけて形成されたこの鍾乳洞は、日本最大級の落差を誇る洞窟内滝「天の岩戸の滝」などで知られ、県内外からの多くの来訪者でにぎわう。今年4月、この鍾乳洞を管理する滝観洞観光センターがリニューアルオープンを迎えた。住田の「北の玄関口」として、町は新施設が観光拠点としてにぎわっていくとともに、沿岸地域への誘客にも波及するよう期待を込める。

センター設計についても、町はプロポーザルを行った。求めたのは「周辺環境に配慮し、それらと一体的な景観を形成するよう配慮すること」など。採用された案は、JR釜石線の上り住駅方面に向かって下がっていく階段状のポリウムとすることで、奥にある食堂や滝流しそば体験スペースまで見通すことができるもの。スギなど地場産の木材を積極的に使用することで、町民の愛着を育み、町外へ発信できるシンボルとなることを目指した。

オープン以降、県内外への積極的なPRもあって多くの観光客が足を運んでおり、順調に入り込みが続けば震災後最多の来場者を見込めそうだという。



滝観洞見学には、難易度別の3つのコースが用意されている

2020年7月に第17回
公共建築賞「公共建
築賞・優秀賞」を受賞し
た住田町役場



住田町役場新庁舎
森林・林業日本一の町を目指す住田町のしく、町産材や地元で製造・加工された木材をふんだんに使用。国内初の実用化となるラチス耐力壁や広い空間をつくりを可能にしたトラス梁、気仙大工の技による錯張の壁、町民から寄贈されたスギの象徴木などが特徴。

公募型プロポーザル
公共工事で事業者を選定する方式の一つ。技術力や経験、プロジェクトに臨む態勢などを含めた提案書の提出を求め、内容を評価して事業者を選定する。



昭和初期の建物の「民俗資料館」(上・右)と調和した上有住地区公民館(上・左、下)。2023年度の土木学会デザイン賞を受賞した

森で拾い集めた種を「イコウェルすみた」で育苗して、育った苗木を広葉樹の森に植え戻す育苗プログラム



住田町の「人」を 好きになってもらう

何度も来たくなる 場所づくり

「住田は人が人を呼ぶまち」と先述したが、同町の一般社団法人・邑サポート代表理事で、神奈川県出身の奈良朋彦さん（49）も住田で暮らす人々に魅了された1人だ。邑サポートは、東日本大震災の支援団体が、2011年に結成し、2014年に法人化。古里を離れて暮らす被災者や地域住民、支援団体をつなぐ活動を行っていた。町内の仮設住宅入居者が全員退去し、建物もすべて解体となった現在は、住民活動支援や地元イベントの企画・運営支援などに尽力している。

奈良さんは震災直後から現地で支援活動に関わり、住田町の仮設住宅建設後はコミュニティ形成を重点的に支援してきた。今は住田高校の魅力化、住民組織のサポートなど地域づくりにも携わっている。2020年、仕事のつながりで出会った町内在住の女性と結婚を機に、神奈川から住田に住所を移し、名実ともに町民となった。

「今、まちづくりを担っている50歳、60歳の人たちでは、いい意味で『子どものような大人』。日常を楽しんでいる人たちに、みんな引かれるんだと思う。だ



住田町の未来について思いを巡らせる奈良さん

から、住田に観光に来てもらうというよりは、住田の『人』を好きになっただけというところが大事。僕たちがそうだったように、『何度も来たくなる場所』を、次の世代の人たちにつくってあげる立場になっているんじゃないかな」と話す奈良さん。

邑サポートでは、町内の各地区で行われている住民組織による地域づくり活動のサポートや、地元の県立住田高校の魅力創出などに積極的に携わっている。

また、町内の森林で広葉樹を中心とした種を採取し、イコウェルすみたの敷地内に整備した育苗施設で管理し、その苗を再び森林へと植えることを目指す育苗プロジェクトを展開するなど、町民にとっても、町外の人にとっても魅力あふれるまちにしていこうと日々汗を流している。

住田に引かれ、移住した人々が、今度は人を呼ぶ立場になる。住田を愛した、よそ者が地域に根付いて地元民となり、その人に魅了された人がまた住田に来る。そうしてこの町は、未来へとつながっていくのだろう。



風景に消えていきそうな気仙川に架かる水路橋。コンクリートと鉄だけで出来た美しい造形

静かに熱いまち

観光まちづくり学部 教授 南雲勝志

まちづくりワークショップで、住民の方に住田町はどんなまちか問いを出したことがあった。「住田町の資産といえば何でしょうか？資産（シサン）だけに一人十二個あげてください」と。すると皆さん意外とすらすら答える。空気、森林、木材、種山、気仙川、水、固い岩盤、石灰岩などといった美しい自然を対象とする言葉が圧倒的に多い。あとは昭和橋、蔵などまちの特徴となる建造物や農業、野菜漬物、鶏ハラミ等食材に関するもの。そこに必ず「人」というキーワードが入っていたことをよく覚えている。

気仙郡は元々住田町に大船渡市、陸前高田市と釜石市の一部を加えた区域であったが現在は住田町のみ。今も住田町には気仙大工だった方がおられ、屋台づくりなどではその技術に随分とお世話になった。先日もお一人一人が、茅葺き屋根の家で元気に暮らす姿を拝見できてとても嬉しかった。

古い町並みや歴史から受け継ぐ古風な人付き合い、若者たちを中心にした新しい取り組みが良い意味で混在して、相乗的にお互いの良さを引き出し、まちを盛り上げている。人口五千人に満たないまちのコミュニティは、とても上手く働いている。情報共有の場は「まちや世田米駅」であったり、まちなかの食堂であったりさまざまだが、みんなが聴いて語り合う場がある。そしてよそのと比較でない、「すみた」に住む良さを発信し続けている。それが住田流である。

さていよいよ今年から栗木鉄山跡保存活用計画が本格化し、昭和橋も架け替え中。それらがいずれ住田町の「懐かしい未来」を発信してゆく事を期待している。

田の「核」になり得る場所です」と話し、「歴史・文化こそ、観光面でそのまちの宝になり得るもの。そこそが栗木ではないか」と力を込める。

たたら製鉄体験から 真のもののつくりを理解する

かつて隆盛を誇った製鉄産業について理解を深めようと、住田町立有住小学校では、児童によるたたら製鉄体験が毎年行われている。

たたら製鉄は、木炭の燃焼熱で「餅鉄」などと呼ばれる鉄鉱石を還元して鉄を得る製鉄法。授業では、子どもたちが炉の組み立てから体験する。

製鉄では、鉄鉱石と木炭を炉に投入していくが、子どもたちは鉄鉱石を砕く作業や木炭を切る作業も行い、当時の手作業の苦勞も体感する。

体験の始まりは、14年前にさかのぼる。2010年、町民有志が有住中学校※1で製鉄体験を開催したのがきっかけで、翌年からは町立有住小学校で体験が行われている。



①たたら製鉄体験を指導する内海さん
②小学生は前日にレンガの炉を組み立て、当日は約1200度に熱した炉の中に鉄鉱石や木炭を投入する作業を体験。4～5キロの鉄を製造した

当時は総合的な学習の時間を使って体験していたが、現在は、住田町の小・中学校、高校が独自に展開する教科「地域創造学」へと引き継がれ、子どもたちは先人の営んできた産業へと理解を深めている。

体験開始当初から携わっている、元教員で現・町文化財調査委員の内海英さん（70）は「あの体験は、一生忘れない思い出になる。住田町は森林資源が豊富なので、いずれは原料の調達から体験させてみたいし、そうすることで真にものづくりについて理解することができるようではないか」と話す。

かつて先人が営んだ産業を体験すること、子どもたちは地域に誇りを持ち、それは郷土愛につながっていくはずだ。

宮沢賢治が愛した種山ヶ原 森林公園が交流の舞台へ

岩手県出身の作家・宮沢賢治がこよなく愛したことも知られる「種山ヶ原」は、北上高地の南西部に位置し、緩やかな稜線の準平原地形と冷涼な気候から、

藩政時代は馬の放牧地として利用された。

現在、夏場は多くのキャンパーでにぎわうほか、雄大な自然を舞台に、森林環境学習、各種イベントも展開されている。音楽の祭典「KESSEN ROCK FESTIVAL」（KRF）もその一つだ。SUMICAの村上さんが帰郷後、「地域に貢献できることはないか」との思いから、2009年、有志とともに種山ヶ原でKRFを開催。KRFは、東日本大震災が発生した2011年を除いて2019年まで種山ヶ原を舞台に開かれ、多くの人に愛されるフェスとして定着した。コロナ禍もあり中断が続いていたが、今年7月に復活を果たし、県内外から訪れた約4000人が音楽を心ゆくまで堪能した。

近年、種山ヶ原では交流人口拡大につながようとトレイルランニング大会も開催され、県内外からランナーや住田ファンたちが集って大自然の中を駆け抜けている。大会のテーマは「つながり」。かつて震災ボランティア、サポーターとし



③種山ヶ原を舞台に開催されたケセンロックフェスティバル
④眼前に広がるのどかな高原。宮沢賢治も愛した種山ヶ原

て住田を訪れた人とのつながりを絶やさず、さらに広げようとの思いから始まった。大会には震災当時ボランティアとして活動した人も参加し、町民と交流しながら種山の自然を満喫。コロナ禍で地域間の往来ができない時期が続いたが、実行委員会では再び全国の人とつながりを強め、広げていこうと大会のあり方を模索している。

※1 有住中学校
少子高齢化が進む中、2023年度をもって閉校し、2024年度に町立世田米中学校と新設統合して「住田中学校」となった。

雪深い石徹白の冬



移住者も参加する白山中居神社の祭り

奥に雪の白山を頂く修験道の拠点、
峠の山々に囲まれる水源地、
石徹白の集落の風景
(写真提供：石徹白洋品店)

“源”の集落で 起こり続ける 温故知新

長良川を遡った峠を越えると現れる「石徹白」(いとしろ)。縄文時代から続く村は、古代より移住者を迎え、自ら生業を作り、世界に開かれる、「生きる力」の源だった。



石徹白ホームページ

構成・文＝ウィルソン麻菜
写真＝田中佳奈
取材協力＝平野養生里（石徹白洋品店）



白山信仰、源の集落

降り注ぐ雨が、つづら折りの峠を下っていく。流れる水に逆らうように坂道を上った先に、石徹白地区はあった。岐阜県と福井県の県境、「日本三名山」のひとつである白山の南麓に位置する、人口220人の小さな集落だ。

白山連峰は4つの県の間にそびえる山で、主に岐阜県を流れる「長良川」、石川県を流れる「手取川」、岐阜県・福井県を流れる「九頭竜川」、岐阜県・富山県を流れる「庄川」という4つの河川の源流域でもある。人が生きる上で欠かせ

さない人たちがいる。むしろ、移り住む人たちがいるのは、一体なぜなのか。ここに暮らす人たちの話を聞きながら、石徹白という場所のことを追いかけていく。

先人に学び、地域を守る

「私が若い頃は、義務教育が終わればここで農業や林業などの生活基盤を作っていくことが当たり前でした。私にとっては神職に就くことも、親や先祖に続く自然な流れだったんです」。

1943年に石徹白に生まれた石徹白隼人さん。石徹白のなかでも特に神道を信仰し、白山中居神社を守る役割を担ってきた上在所地区で生まれ育った。白山中居神社の神職を担いながら林業や町会議員なども務め、地域を主軸となつて支えてきた人だ。

高度経済成長で集落を出ていく人が後を絶たないなかで、隼人さん自身は外に出ることはなかった。「私自身は外に出たいとは思っていなかったし、やはり最後までここにおるだろうと思います。そして、ここにおる以上は少しでもいい形でみんなが暮らしていけるようにしたい」。

1年の半分は雪で覆われてしまう石徹白は、農家であっても働き方を工夫せざるを得ない。雇用を生む企業があるわけでもなく、ここに来れば経済的に安心できる仕事があるわけでもない。「今の時代でも、都市部への距離や流通の問題など不利な点があるのは間違いない」と隼人さんは話す。その上で、「それを逆手

時代とともに 地域の形が変わる

石徹白は、信仰者を受け入れる御師のむらだった。江戸時代、この集落に住む人々は「武士・農民・職人・商人」といった身分制度に当てはめられず、神社に仕える社家社人として布教活動に励んでいたという。西暦82年にできた白山中居神社を中心に、夏は宿坊を営み参拝者を案内し、冬には全国各地での布教活動を生業にする御師たち。そういった活動の影響からか、山深い場所にある小さな集落にもかかわらず、常に外の人々との交流があったのが石徹白という場所である。

衣食住を自然の暮らしのなかで賄いながら御師活動で収入を得ていた石徹白だが、徐々に時代の変化にのみ込まれてい



石徹白地区の鎮守、白山中居神社と杉木立

く。まず、明治時代に神仏分離で修験道が禁止されたことで、御師としての収入が得られなくなった。その後、経済を支えたのは「石徹白杉」を中心とした木材の伐採・製材。さらに、終戦を迎えて高度経済成長が始まれば、多くの地域がそうだったように、働き手や経済的に余裕のある者たちが都市部に出ていった。ただでさえ都市部からは遠く、厳しい自然環境のなかにある石徹白からの人口流出が止まることはなく、1950年代に1400人だった人口は、70年間で7分の1にまで減ってしまったのである。しかも、その半分は65歳以上の高齢者だ。

ただ、希望はある。石徹白はここ10年で少しずつ移住者が増え続け、今や人口の4分の1が移住者という珍しい集落なのだ。実はこれまで、平安時代に奥州の藤原

地域を支えてきた白山中居神社の
神職でもある石徹白隼人さん

秀衡の名のもとに虚空蔵菩薩像を守るために移住してきた人々や、明治時代に製材業のために移り住んだ人々など、各時代で石徹白が傾き始めると移住者がやってきては、地域の人とともに集落を立て直したという歴史がある。

山々に囲まれた石徹白は、決して「簡単に住める場所」とは言えない。都市部までは山を越えねばならないし、豊かな自然は時に厳しく、何より冬は深い雪に覆われる。それなのに、この集落を手放

に取るくらい知恵を、地元民と移住者で結託して出したい。神社に奉仕させていただくなかで訪れる方々に『あの峠を越えてきたから見える世界がある』と言われたことがあります。きっとこの地域で生きることでは、発信できないことがあると思います」と、力強い眼差しで続けた。

御師の活動の記録を見ると、決して楽な仕事ではなかったはずだと隼人さんは語る。雪が降るなかで石徹白を出ていくことも難儀な時代、お札や薬草を手にと遠くは岡山県まで訪ねていった記録もある。その先人たちの苦労や生き様に学ぶことが多くあると話した。

今、日本の多くの地域が抱えている人口減少や過疎の問題。実際に移住者が増えていく石徹白の現状や今後の動きが、きっと他の地域にとってもヒントになる



水力発電所を作った人々

まちづくりの根本は「自分のため」

小水力発電の受け入れに賛同した地域住民の一人、久保田政則さんにもお話を伺った。石徹白で育ち、自動車部品メーカーを経て、現在は石徹白で自営する技術者だ。小水力発電の導入の際、技術的な知見を持つ久保田さんの働きは大きく、NPO法人「やすらぎの里」としての2代目理事長として尽力した。

久保田さんが高校を卒業する頃は高度経済成長の真っ只中。都市部での就職が主流であり、久保田さんも一度は愛知県で就職した。10年以上務めた会社を辞めて故郷に帰ってきた理由を問うと「やっ



故郷石徹白に戻り電子部品製造会社を営む久保田政則さん。小水力発電に尽力

ぱり自分の生まれ育ったところが非常に好きなんですよね」と照れくさそうに笑った。大手企業を退職して石徹白に戻ることは周りにも反対されたと言いつ、自身も決断を後悔しかけたこともあるという。「帰ってきたことが良かったか悪かったかは、人生が終わる頃にならないと分からない。けれど、石徹白がよい地域になれば、ここで頑張ってきた意味があります」。

農業用水農業協同組合や漁業協同組合の理事、白山中居神社の役員なども担ってきた久保田さん。いくら生まれ故郷とはいえ、なぜそこまで地域のために活動を続けてこられたのか。『地域のため』なんて、重たいものではないんですよ。少しでも環境がよくなれば、自分自身が年を取っても住みやすいし、みんなも住みやすいやろうって。本当に単純なんですよ」。

最後に夢を聞くと、「この地で灰になるまで生きていきたい。それができる環境であってほしい。ささやかな夢ですけどね」と久保田さんは遠くを見つめた。

「自分はどう生きるか」を考え、このまちにいる

平野夫妻を地域に受け入れ、住民たちとつないでくれた兄貴的な存在が石徹白秀也さんだ。大学進学で一度は名古屋に出たものの、卒業後は故郷に戻って家業の建設会社で働いてきた。また、2009年からは「石徹白地区地域づくり協議会」の事務局として、彰秀さんと

ともに移住者や地域おこし協力隊、最近では親子山村留学などの受け入れを行っている。

聞くと、秀也さんは都市部での就職を断って石徹白に戻ってきたという。時代に逆行した決断の理由を聞くと、「自分のような若者が一人でも戻ることでは何か力にならないかと考えたんです。大層な考えや能力で戻ってきたわけじゃないけど、自分はどう生きるか」を考えたら、戻った方が面白いんじゃないかと思ったんですよ。秀也さんのなかにあったのは、建設業や自治会長として地域のために一生懸命働く父に憧れた記憶。幸い、家業という働く場所があったことも、背中を押した。

当時の思いのままに、秀也さんは建設会社の社長としてだけでなく、「石徹白地区地域づくり協議会」の事務局や公民館館長など地域の主軸となり活動してきた。地域に入ってきた彰秀さんたちを「最初は、一定期間で去っていく風の人」なんだろうと思っていた。でも、彼らは「土地の人」になろうとしたんだよね」と振り返る。「多くの人が出ていく流れに逆らって入ってくるあまのじゃくなところが、僕と合うのかもしれない」と、豪快に笑った。

今後は移住者を含め、若い世代に活動の中心を譲っていくことになる秀也さんは言う。「地域づくりに終わりなんて



石徹白の自然の中、川辺で遊ぶ親子。この十数年で移住者の子供たちも増えた

ないんですよ。多少の波はあったとしても、やっぱり死ぬまでやっていくものなんじゃないかな。肩書きがつかない一市民に戻っても、同じ気持ちになって後進と一緒に活動していくことが、自身の次の役割だと語った。



移住者も受け入れる「石徹白地区地域づくり協議会」の石徹白秀也さん



石徹白に移住して家族を育む平野彰秀さん
平野馨生里さんと子供たち(写真提供:石徹白洋品店)



石徹白に「自分のまち」を見出し移住したプランナーの平野彰秀さん

その後、大学院でまちづくりを学ぶなかで恩師から伝えられた「自分のまちを持って」という助言が、彰秀さんに影響を与えた。「まちづくりの専門家としてひとつの地域に根付きたいと

原体験は田園風景のなかに
隼人さんをはじめとした地域住民に魅せられて石徹白の地に移住してきた夫婦、平野彰秀さんと馨生里さんには、それぞれに移住の背景があった。まずは、彰秀さんのストーリーを紹介する。

彰秀さんは岐阜市の郊外に生まれた。冬はたこ揚げ、夏はザリガニ捕りなどの原体験が詰まった田園風景が、開発により徐々に駐車場や店舗に姿を変えたと振り返る。「日本の田園風景を取り戻したい、どうすれば自然と人が調和できる暮らしが成り立つんだろう、という気持ちはずっとありました」。

その後、大学院でまちづくりを学ぶなかで恩師から伝えられた「自分のまちを持って」という助言が、彰秀さんに影響を与えた。「まちづくりの専門

思いました。ただ、それがどこのかは長いこと分からなかったんです。「自分のまち」はどこなのか――。東京で商業施設のプロデュースや企業の経営戦略コンサルタントとして働きのながらも、彰秀さんはずっと自分のまちを探し続けていた。

水の豊かな集落と、まちづくりが出来る
2001年、彰秀さんは岐阜市のまちづくりを考えるNPO法人「G・net」を、岐阜出身の仲間たちと立ち上げた。その活動のなかで、同じく岐阜市出身だった馨生里さん、そして石徹白にも出会うことになる。

彰秀さんたちは「地域の持続可能性」に着目し、さまざまなものを地域内で循環させていく重要性を感じていったと話す。特にエネルギーは暮らしに欠かせない存在でありながら、地域外に頼らざる

自然と人とが調和するヒント
小水力発電が始まった2007年、彰秀さんは月に二度ほど東京から石徹白に通う暮らしを続けたが、翌年には仕事を辞めて岐阜市へUターン。石徹白への移住を見据えて、家探しをしながらまちづくりに関わり始めていた。

この時点で、彰秀さんは石徹白を「自分のまち」として活動する気持が固まっていたという。「縄文時代から脈々と続く集落が、社会経済が原因でなく

を得ない。そこで、長良川を筆頭に水に恵まれた郡上市だからこそ、小さな水流を活用して小水力発電ができないかと考えた。

難色を示す地域が多かったなかで、「やってみよう」と受け入れてくれたのが石徹白だ。当時すでに人口3000人を切っており、少しでも地域のためになるならばと小水力発電にも門戸を開いたのだ。また、石徹白には1955年まで30年以上、水力発電で集落の電力を賄っていた歴史があったことも、協力への助けとなった。



上掛け式水車による水力発電機を設置。他のタイプの水車もあり、水力で地区全住民の電力を賄う(©平野彰秀)

なるのはあまりにも惜しい。地域存続のために何かできることがあるのではないか。また、石徹白の人々の「生き抜く力」にも圧倒された。長く続いてきた自然と人が調和する集落の姿に、自身がずっと抱えてきた疑問の答えがある気がしたという。「ある時、石徹白隼人さんから『自然の利息のなかで暮らしなさい』という代々神職に伝わる言葉聞きました。元本には手をつけずに継続を見据えた考え方。地球環境の持続性を考える上でもヒントになる価値観を、石徹白の方々は持っていると思いました」。

信仰心を持って自然に感謝し、お互いに助け合いながら生きる。日本の社会で失われてきた暮らし方や精神性を、自ら学んで受け継ぎたい。2011年9月、彰秀さんは馨生里さんとともに石徹白に家を購入し、自らも住民となった。



① たつけの作り方を教えてくださった小枝子さん ② 田植え時の「刈干し刈り」*姿の小枝子さん(写真提供:石徹白小枝子氏) ③ 聞き取りで作り方を学んだ「たつけ」 ④ 石徹白洋品店での藍染作業 ⑤ NPOのメンバーで花畑を整える ⑥ 村の方に古い布について教わる ⑦ ⑧ ロンドン、ウイリアム・モリス・ギャラリーでの「MINGEI ART WITHOUT HEROES」展に石徹白洋品店が出展、シンポジウムも行う (①③④⑥⑦⑧ 写真提供:石徹白洋品店)

*刈干し刈り:「刈干し」とは、冬、馬を養うための草を刈って干したもの。その草を刈ることを「刈干し刈り」という

に「聞き書き」がある。石徹白に住む人々に話を聞き、文章にまとめるこの作業を、馨生里さんは心から愛していると話す。2010年に公民館活動として始まった活動で、馨生里さんと仲間が中心となって現在までに3冊の「聞き書き集 石徹白の人々」を発売した。これまでの石徹白を知る人々の生の声が方言のまま収録され、まるで目の前で彼らが話しているような文章だ。「聞き書きは労力がかかる割に収入にはつながらない活動です。でも、私はこれをやらなければ生きていけないくらい好きなんです」と、馨生里

さんは過去に話を聞いた人々のことをいとおしそうに語る。聞き書きで馨生里さんのなかに蓄積された石徹白への愛着は、「石徹白洋品店の商品に落とし込まれている。『石徹白を伝えるためのツールとして服を作っている』と馨生里さんは断言し、服だけでなく各商品の作り方をまとめたテキストの販売や作り方を教えるワークショップにも力を入れている。馨生里さんが作り方まで伝えるのは、現代の多くの人に「生きる力」が必要だと感じているからだ。「ワークショップでたつけ作りを教えられ

ば、みんなできる。そのたくましさを身につけておけば、何があっても幸せに生きられると思うんです」。

石徹白に残るたくましさを込めた石徹白洋品店のメッセージは今、多くの人々に届き始めている。全国各地での出張販売に加え、今年はイギリスの歴史ある博物館ウイリアム・モリス・ギャラリーで「民藝を受け継ぐものづくり」としても紹介されている。「石徹白の方々が減って、残せることも少なくなっています。でも、辛うじて彼らと人生を交えることができ

た私だったら、何かを残せるのかもしれない。次の世代にバトンタッチできるのかもしれない。そう思いながらやっています」と、馨生里さんは前を向いた。

アイデンティティーにつながるものづくりを探して

「土地の人」になるべく石徹白に移住した平野夫妻。今度は、石徹白に昔から伝わる独自の服作りを伝える「石徹白洋品店」を営む馨生里さんの話を聞いてみると、彼女の原点は学生時代、遠くカンボジアまで飛んだ。

神奈川県の大学で国際協力を学んでいた馨生里さんは、カンボジアの内戦で途絶えたクメール織物復活の村でフィールドワークを実施。カンボジアの人々とクメール織物の強固な関係性に感銘を受ける一方、日本や岐阜に誇れるものを持たない自分を省みることとなった。自分なりの「故郷」となる何かを探しながら、彰秀さんも参加していた岐阜のまちづくり団体「Gnet」に携わるようになる。そこで出会ったのが、平成以降に姿を消した岐阜の伝統工芸品「水うちわ」。ニスを塗った薄い美濃和紙を張った優美なうちわ。故郷の誇れるものづくり復活のため、馨生里さんは仲間たちと奔走し



石徹白に移住し、石徹白洋品店を立ち上げた平野馨生里さん

忘れてしまった価値観を残したい

通い始めてすぐに、馨生里さんはすっかり石徹白にほれ込んでしまったのだという。彰秀さんと同じく、石徹白の人々の「生きる甲斐性」を目の当たりにして、自分自身もこの地で暮らしたいと思うようになった。活動をとみにしていた石徹白の仲間は歓迎してくれたが、郡上市内の人からは「石徹白の冬を3回経験してから決めたほうがいい」と助言された。それほどに石徹白の冬が厳しいということだが、2月の雪が積もる石徹白の冬を4回経験しても、やはり気持ちは変わらなかった。「私が躍起になって雪かきをすれば、85歳のおじいさんが『そんなに慌てんでもええぞ、雪は春になったら落けるからなあ』と言ってくれたり。『雨が降れば植物が育つし、台風なら休めるからありがたい』と話すおばあさんもいるんです。すごく本質的な、と」。

地域を伝える服作り

石徹白の人々と話すとき、馨生里さんはまるで何世代も前の日本人と話しているような気持ちになるのだという。それはおそらく経済発展のなかで日本人が失ってきた大切な価値観を石徹白の人々が持ち続けているからだ、と馨生里さんは考えている。そして、そういう石徹白を受け継ぎたいと強く思ったのだった。

地域に伝わる民衣との出会い

家探しと並行して服飾学校に通った馨生里さんは、移住の翌年に「石徹白洋品店」を開業。仕事がない石徹白で暮らすために選んだ、ものづくりの道だった。当時から石徹白の草木で染めたワンピースなどの洋服を作っていたが、今の「石

たくましさを残す聞き書きと洋服

もうひとつ、馨生里さんが始めた活動



① 雪深い峠の村、冬の石徹白の風景 ② 昔の田植え姿。田植え時に活躍する「たつけ」を着用(写真提供: 鷺谷吉明氏)



石徹白で生まれた子も楽しく藍染糞の管理の手伝いをしてくれる

久保田さんや秀也さんが「地域のためなんて大それたことじゃなくて、自分のためなんです」と言ったことも思い出す。一見利己的に聞こえるこの言葉も、巡り巡って、人々が共同体であることを思い出させてくれる。

そこに集まる人々によって、まちはできている。そして住み心地のいいまちは、人々を豊かに生かす。髻生里さんが話した「住んでいるところへの愛着と誇りがあれば、本当にね、何があってもひっくり返らない強さみたいなものになるんです」という言葉は、「自分のまち」を諦めない石徹白の人々の生き方そのものだった。



「カルヴィライとしる散策マップWalking map・石徹白歳時記」図版提供・宿泊施設カルヴィライとしる culvilla.com

語り、住み継がれる石徹白

観光まちづくり学部 教授 椎原晶子

今回、初めて訪れた石徹白は雨だった。神社を包む深い杉木立に降る雨がそのまま地面を流れ、沢を作り、石徹白川、九頭竜川の源流になっていく。その水で杉を育て、田畑を潤し、釣り場を作り、小水力発電をして、自給自足と外部との経済・文化交流を二千年以上も続けてきた集落だ。

最初に「石徹白」に出会ったのは、東京・谷中で開かれていた「石徹白洋品店」のポップアップショップだった。飾り気のない、自然素材の、人の手で作られた温かみのある服が並んでいた。「ずっと長く着られそう」と思い、石徹白の民衣を再現したズボン「かるさん」を買って着てみて、その着やすさ、動きやすさに驚いた。語ってくれた店員さんは石徹白にインターンに行つてその暮らしと服作りの魅力に惹かれて、移住した方だった。

それから、石徹白の人々の暮らしを「聞き書き」した本や、「かるさん」、「たつけ」など民衣の作り方を書いた冊子を読み、お話を聞いて、石徹白の人々は、縄文時代以来、修験道、林業、農業など時代ごとの求めに応じながら峠の集落に住み続けてきたことを知った。

かつて白山への修験者を迎える石徹白の御師は、集落が雪で閉ざされる冬の間、日本各地を回つて石徹白の文化を広めたという。現代の石徹白に住む人々も、暮らしを語り継ぎながら、移住者を迎え入れる。日本や世界の村で持続的な暮らしを模索する人たちが、自ら石徹白に入って生業を築き、さらに新たな移住者を惹きつけている。

世界に開かれた源流の村「石徹白」に、自分のまちへの誇りを語り、住み継ぐ普遍的な力を教えていただいた。



冊子:『[いとしる聞き書き集] 石徹白の人々I,II,III』
発行:石徹白聞き書きの会



海外支援に携わったのち、石徹白に移住してから
フォトグラファーとなった田中佳奈さん

石徹白に集まる人たち

平野夫妻が石徹白に移住した13年前から、彼らの後に続く移住者が少しずつ増え始めた。石徹白洋品店スタッフの松尾由佳さんは、石徹白洋品店のインターンに参加後、鹿児島島から移住。販売を中心に、SNS発信などあらゆる業務をこなし戦力として髻生里さんを支える。インターンは毎年冬に募集し、受け入れは4月から9月。最短でも3週間からの参加で、長い人は半年間、住み込みで藍染めや草木染め、地域での服作りを学ぶ。

2012年から始まった地域おこし協力隊でも、これまで7人が石徹白に移住した。フォトグラファーの田中佳奈さんも、その1人。知人の紹介で石徹白を知り、協力隊として赴任するなかで移住を決意した。現在は岐阜市から移住してきた農業を営む夫と、2人の子供と石徹白で暮らす。移住後にフォトグラファーとなった彼女もまた、石徹白に住むために仕事を作った人だ。聞けば、学生時代は

人が集まり、まちとなる

移住者だけでなく、石徹白洋品店をきっかけに観光客として石徹白を訪れる人々も多い。夏の間だけオープンする本店に商品を買いくるお客さんいれば、各地のポップアップで石徹白を知って訪ねてくる人もい

る。また、全国各地には石徹白洋品店の想いを受け取って販売を担う小売店や販売スタッフも増え始めた。石徹白に暮らすことはできなくても、石徹白洋品店を広めること、購入すること、石徹白を訪れることで、この集落を守ろうとする人々が確かにいる。

現在、石徹白を訪れる人々に向け、平野夫妻は宿の営業準備を進めている。「昔は20軒以上あった民宿も人口流出と高齢化でかなり減ってしまいました。人が来ても宿が足りない現状と、もうひとつ、石徹白の建物を残したいという気持ちがあります」。

譲り受けた古い「たつけ」を手を取るたびに、今でも新しい発見があると話す髻生里さん。実際の物から受け取れる情報も伝えていくため、まずは現物を残したいと話す。集落の築150年の建物を整えて2025年の開業を目指す宿は、滞在しながら石徹白らしい体験ができる場所として、外の人々と地域を接続していく役割を持たせていく予定だ。

そう考えると、石徹白洋品店は「現代における御師」なのかもしれない。夏場

外と地域をつなぐ場所

移住者だけでなく、石徹白洋品店をきっかけに観光客として石徹白を訪れる人々も多い。夏の間だけオープンする本店に商品を買いくるお客さんいれば、各地のポップアップで石徹白を知って訪ねてくる人もい



①雪の斜面で遊ぶ石徹白の子供たち ②移住した親子も参加する冬の餅つき ③移住してきた石徹白洋品店の若いスタッフやワークショップ参加者たちとの服作り ④写真提供:石徹白洋品店

「観光まちづくりフォーラム」開催報告

持続可能な地域の実現に向けて

第一部

人材育成と地域の発展を目指す
観光まちづくり学部これから

2023年11月8日、第4回「観光まちづくりフォーラム」が國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホールで開催された。2期生を迎え、さらに発展・拡充が期待されている観光まちづくり学部が考える「観光まちづくり」とは何か、持続可能な地域の実現に向けた観光の役割について、議論が展開された。

第一部は、主催者と来賓の挨拶に続き、西村幸夫学部長が学部概要について説明した。

地域との連携によって広がる
学生たちの学びの場

第一部は、初めに針本学長が来賓へ礼を述べ、当日のフォーラムのプログラム紹介、およびフォーラム開催の意義について語った。

針本学長は、近年、国内外で発生している災害が地域社会に与える影響に触れ、観光まちづくり学部が掲げる「地域を見つめ、地域を動かし、持続可能な地域の実現に向けて」という基本理念の重要性について強調し、今まさに観光まちづくり学部を開設した意義が問われていると述べた。

また、岐阜県高山市、愛媛県内子町など包括連携協定締結地域で教員や学生たちの活動が広がっていることも報告し、観光まちづくり学部への支援に感謝の言葉を述べた。

再開発事業から
文化遺産を守りたい

続いて、来賓の岡田保良氏（一般社団法人日本イコモス国内委員会委員長）は自身とイコモスとの関わりや経

歴、西村幸夫観光まちづくり学部長の後任として委員長に就任したことなどを説明。

岡田氏は、神宮外苑の再開発の問題に触れ、「イコモスは文化遺産の保護の実現を目指すという立場から活動している」と話し、「神宮外苑・内苑は我が国にとってかけがえのない観光資源」と、その歴史的・文化的価値について説明した。

さらに、高輪ゲートウェイ周辺の開発によって発掘された日本最初の鉄道線路遺跡「高輪築堤」についても言及。世界遺産にも匹敵するような貴重な遺跡だと述べ、遺跡が保存されていけば、一大観光スポットになったかもしれないと語った。文化的な遺産が昨今の再開発事業の犠牲となっていることを危惧し、「イコモスは文化を大切にしたい。本町のまちづくりに取り組む方々を支援したい」と述べた。

文理融合で人材育成
実践的な演習科目を展開

西村学部長からは、学部開設から1年半が経過し、改めて観光まちづくり

の定義や目標を教員たちと再考した結果、12のメッセージをまとめたことが報告された。

12のメッセージは「地域の個性をみつけ、みがく」「地域の多様なつながりをつくり、活かす」「地域の暮らしを支え、豊かにする」「地域の未来をつくる人材と仕組みを育てる」という4つの柱に基づいており、学部の教育システムがこの理念に沿って構築されていると説明。

活力ある地域の実現に寄与できる人材の育成を目標とし、アートやデジタルサイエンスの科目を設け、文理融合の教育を実施していると説明した。

さらに学生のグループでのフィールドワークや、チームティーチングによる教員の全学生支援を特徴とする演習科目の導入など、新しい学部ならではの取り組みを報告した。

今後も「地域を見つめ、地域を動かす」をモットーに、実践的な観光まちづくりの教育を継続し、学部の活動を通じて人材育成と地域の発展に貢献したいと表明した。

第二部

シンポジウム「地域の暮らしと観光まちづくり」

第二部のシンポジウムには3名のプレゼンターが登場し、それぞれが実践している「観光まちづくり」について講演し、パネルディスカッションへと続いた。

地域の人も気づかなかった
生活圏を歩く楽しいコース

熊本県美里町で、歩いて楽しむ観光「フットパス」を推進している井澤氏はこの取り組みに着手した経緯について、過疎化し限界集落と呼ばれていた美里町を「どうにかしたい」という思いで始めたと言った。

本来の目的は観光による交流人口の増加であったが、取り組み開始当初は地域の人には「観光」という言葉は使わなかった。地域の人は「観光」と聞いただけで拒否反応を引き起こすため、「観光」と言わない観光まちづくりの方法が「フットパス」だったと振り返った。

フットパスを実現するためには地域の人を主体にする必要があると考え、「私たちは仕組みをつくり、黒子になる覚悟で始めた」との思いを述べた。

フットパスを、「受け身ではない新しい観光」と位置づけ、「寄り道ができて、その地域の魅力に気づいてもらい、地域の人と話ができるコースを一生懸命考えてつくっている」と説明。コースの選定や整備に力を注ぎ、使い捨てにされないような高品質なマップも作成した。道標も過剰に設置せず、地域の人に声をかけ歩けるように工夫している。

さらに、「ガイドは道案内であり、解

説をするのではなく、参加者から質問を引き出す工夫をする」「お邪魔します」の気持ちを持ってもらえようというマナーを伝えること」とガイドの役割の重要性について言及。生活圏を歩くコースならではの注意点として、「地域の人への挨拶の奨励」「歩きた来た人だとわかる服装で歩くこと」などを示した。現在では地域の人が主体的に取り組み、過疎化が進んだ地域であっても、歩きた来た人たちに「いいところですね」と言ってもらうことで自信を持ち、それがシビックプライドの醸成につながっていると語り、「あくまでも地域が主役」と強調した。

その結果、地域の人が自主的にコースの管理や草刈り、道標のメンテナンスなども担ってくれているという。

交流人口の増加について、「ブームは経費をかければ4〜5年は持つが、必ず去る。ムーブメントにするには10年かかる」との思いを語り、覚悟を持った取り組みが10年を経過し、1年に一つずつコースを増やして、今は19コースが歩かれていますという。

地域との交流を深める
緑がわカフェと食の体験

“おもてなし”と“地域が潤う仕組み”を混同しないことの重要性を挙げ、“地域が潤う仕組み”としてつくった「フッ



地域の人の協力で始まった緑がわカフェ



使い捨てられない工夫をしたマップ



美里町の田園風景を歩いていく

トパス弁当」を紹介した。

わざわざ美里町に来たのだから、から揚げやハンバーグではなく、美里町らしいものを食べたいという要望に応え、美里産の食材を使い、容器を統一し、パランやアルミホイルの使用を禁止している。

また、「緑がわカフェ」での食の体験プログラムを実施し、昔のお祭りで各家が料理を持ち寄って集まった光景を再現。田舎のお茶漬や漬物、まんじゅうなどで地域の人と参加者が一緒に食事をし、楽しい時間を過ごしてもらっている。

現在、緑がわカフェは町内に6カ所ある。これをきっかけに、民宿が2軒、予約制のカフェスペース、外国人も受け入れる体験施設なども整備された。今では「どこから来たの?」「あそこは見晴らしがよいよ」「庭の花を見ていきますか?」と声をかける地域の人が増え、それが美里町らしい「おもてなし」だと語った。

井澤氏は、「フットパスの運営は行政からの補助金を受けておらず、自立はするが儲からなくていいと考えている」と断言した。

美里町の時間の流れに合わせ、次のステップに行きたいと語った井澤氏。「ぜひ皆さん、美里町に来てください」と呼びかけ、締めくくった。

地域が主役のまちづくり
フットパスで我がまちを魅せる

井澤り子氏

合同会社フットパス研究所 代表、美里フットパス協会 会長（熊本県下益城郡美里町）

川口洋美氏
株式会社ツールドラック 代表取締役 (滋賀県大津市)琵琶湖畔で日本文化を体験できる
外国人向け観光ツアー滋賀県ならではの体験
本物に感動する外国人観光客

川口氏は、滋賀県の琵琶湖畔で取り組んでいる外国人向け観光ツアーについて語った。まずは、ツアーを実施しているエリアについて、英語版の地図を示しつつ、京都のすぐ隣の大津市を拠点にしていると解説し、「一大観光地であり、すでに多くの外国人観光客を集めている京都から、いかに誘客するかが重要なポイント」と述べた。

ツアーの重点エリアとして琵琶湖西側を挙げ、新幹線や高速道路が整備された東側と違い、古い史跡や自然が残っているのが特徴と強調。例として、滋賀県最古の神社であり、地元の人から信仰を集める白鬚神社を挙げ、湖に佇む鳥居が印象的であり、滋賀県観光の象徴的な存在と紹介した。

次に「日本の棚田百選」にも選ばれた高島市畑地区の「畑の棚田」の美しい写真を見せ、「日本の原風景と呼べる場所」と紹介し、ここで実施しているツアーについても説明した。

さらに一番人気のツアーとして「お餅つき」を挙げた。このツアーでは、餅つきの一連の過程を参加者と一緒に体験できるのが特徴。外国人には苦手な人が多いであろう納豆をアレンジした餅など、この地域のソウルフードと言えるような独特な食べ方

などにも挑戦してもらっているという。滋賀県の郷土料理である「ふなずし」についても触れ、「滋賀は実は長寿県で、発酵食品をよく食べているからではないか」といわれている。こうした話をするひと口食べてみようという手のひら」とツアーの様子を語った。

もう一つの人気ツアーとして、屋根職人の工房を訪れるツアーを紹介。滋賀と京都にまたがって世界遺産・比叡山延暦寺があることから、麓の滋賀県側には寺の屋根瓦の職人が昔から多く居住していた。今も檜皮葺や鬼瓦など屋根職人の工房がいくつかあり、そこを訪れるツアーが人気で、参加者は瓦を磨く体験もできる。

ツアー代金は二人で参加の場合、一人3万円で、高額である理由として、寺の数が減るとともに、屋根工事の機会が減り、それに伴って職人の数も減っている現状に触れ、屋根職人の文化を残すためにも、工房の収入に結び付くツアーにしたかったと説明。安価な観光客向けの体験を提供するのではなく、本物の鬼瓦磨きを体験してもらい、相応の対価をいただくという考えに至ったと語った。

ターゲットは文化への関心が高い
ラグジュアリー層の欧米市場

ツアー造成の考え方として、「誰に」「何を」「どのように」提供しているかに触れ、「誰に」は、京都に滞在する40〜60代の教養のある旅慣れた外国人、特にラ

グジュアリー層の欧米人と説明。集客には旅行会社のネットワーク力を借りていると話した。

「何を」については、京都では味わえない滋賀ならではのユニークな体験を提供することで差別化している。

「どのように」については一番大事にしているのは「多方面に露出し過ぎないよう」にすることと述べ、どこでも買える商品と思われず、予約ができたことに価値を感じてもらえるように注意していると述べた。

実際にターゲット層の観光客が集まっております。「地域の食文化への関心があり、地域の方に対するリスペクトを持って、しっかりお金を払ってくださる理想のお客様」と表現した。だからこそ地域の方も職人も受け入れてくれている。「誰をお客様にするかということが地域の品格、品位を保つことにつながる」と話し、「地域の良さを理解し、それを態度で示してくれる人が来てくれるから地域の品格が保たれる」と強調した。

最後に「一番うれしいことは、日本で体験したたくさんの方々のツアーの中で一番楽しかったと言っていただけのこと」と述べ、「観光は国の光を観るといわれますが、おじいちゃん、おばあちゃんのような、特に注目されることのない名もなき一人の人間にスポットライトを当てて、それが自分のできる観光。環境問題など不安もあるが継続していきたい」と締めくくった。



本物の鬼瓦も近くで見られる



屋根職人の工房を訪れるツアーも人気



一番人気のお餅つきツアー

琵琶湖のシンボリックな風景となった白鬚神社
©(公社)びわこビジターズビューロー第4回
「観光まちづくりフォーラム」開催報告
持続可能な地域の実現に向けて

町屋を巡るイラストマップも作成した



全国からたくさんの方が訪れるようになった



地元の商家に保存されていた屏風を公開した「町屋の屏風まつり」



「町屋の人形さま巡り」の様子

村上地区のシンボルとなる
古い町屋の中を見せる

吉川氏は、新潟県村上市で取り組んでいる町屋を活かしたまちづくりについて語った。

古くからの城下町である村上地区は約25年前、道路拡幅を伴う大規模な近代化の波が押し寄せてきたという。ちょうど同じころ町並みを研究している専門家から「近代化して成功している地方のまちはない」と聞いた吉川氏は、悩んだ末に「食い止めなければいけない。このままでは村上の城下町の価値が失われる」と危機感を抱き行動を起こしたという。

「村上を守りたい」「近代化を食い止めたい」と反対の署名活動を行ったが、周りからは理解されなかった。そこで方針を転換し、村上の歴史的価値を活かした活性化に取り組みくことにした。「もしこれが成功すれば古いものの価値が見直され、壊すのではなく、残して生かすという方向にきつと変わらな」と当時の思いを語った。

吉川氏が悩むなかでたどり着いたのが、町屋の「外」ではなく「中」であった。歴史のまちのまちづくりという、町並みや景観を活かしたものが一般的だが、家屋の内部に入り、その奥の生活空間を活かすことにしたのだ。外観はシャッターやアルミサッシに変わっていたが、内観には昔ながらの町屋のつくりが残っていたからだ。

「これこそが村上の本物であり、まち

行政に頼らずに市民の力で推進

地元の誇りを取り戻したまちづくり

づくりのシンボルになる」と考えた吉川氏は、古い町屋の中を見せてもらえる住民を募って名簿をつくり、マップをつくって配布した。この取り組みが話題になり、テレビや新聞に取り上げられ、マップを持って歩く人が来訪するようになってきた。この時賛同してくれたメンバーが「村上町屋商人会」につながっている。

2つのイベントを通じて
まちが活況を取り戻す

さらに立ち上げたのが「町屋の人形さま巡り」というイベント。村上の各家に残っていた古い人形を飾るという取り組みは、NHKで全国放送され、一挙に訪れる人が増えた。

そして村上のもう一つの核になるイベントとして「町屋の屏風まつり」を企画。地元の伝統文化である屏風を60〜70軒の地元の商店が無料で公開した。これらのイベントに訪れた旅行者から「いろいろが素敵」「太い柱や梁の佇まいが素晴らしいです」と声をかけられ、外部からの評価を受けたことで地元の人々も少しずつ気持ちが変わってきたという。人々の意識が変わったことが、町屋の価値の再評価につながったと吉川氏は語る。

このころ始まったプロジェクトとして、「チーム黒塀プロジェクト」を紹介。これは、商店街から一步入った小路にある寺や割烹などの建物を囲むブロック塀

を、昔の黒塀に戻す取り組み。市民から1口1000円の寄付を募り、それを資金として板を購入し、塀をつくっていった。ブロックを壊さずに上から板を打ち付ける簡易なつくり方だったが、「目に見える形で示していくことが大切だった」と当時の思いについて語った。

黒塀にさらに緑を増やすという取り組みも第二弾として実施し、これにより中心部の景観が大きく変わり、「人形さま巡り」「屏風まつり」以外の時期でも、一年を通して人が来るようになった。

「村上らしさに磨きをかけることが大事だった」と強調した。

再生にかかる費用については、「恐らく全国で初めて、市民が集めたお金を使ってまちの外観を再生する補助金を創設した」と述べた。補助金は一軒当たり最大80万円で補助率60%とし、外観が改善され来客が増えた結果、売上が3〜10倍に増加し、「壊して新しくするのではなく、古いからこそその良さを残すことで魅力を高め地域の発展につながると実証された」と力強く語った。

近代化計画があった村上は旅行者が増え、地元の人々の意識や行政の方針が変わり、まちの再生が実現した。吉川氏は「まちが活気づくだけでなく、地元の誇りも取り戻した。今、前に進んでいるということが本当にうれしい」と結んだ。

吉川真嗣氏
株式会社千年鮭きかわ 代表取締役社長 (新潟県村上市)

第二部

シンポジウムパネルディスカッション 「地域の暮らしと観光まちづくり」

フォーラム第二部の後半は、3名の登壇者にヨルダン・サント國學院大學特別招聘教授を交えてのパネルディスカッションを実施した。
西村学部長がモデレーターを務め、「地域の暮らしと観光まちづくり」をテーマに活発な議論が展開された。

それぞれの地域が実践する

暮らしに根づいた観光まちづくり

「観光」の原点に立ち戻って 観光まちづくりを考える

西村…パネリストの皆様、感動的なお話をありがとうございました。まず、ヨルダン・サンド先生に感想やコメント、ご自身の思いをお聞きたいと思ひます。

サンド…ヨルダン・サンドです。以前はアメリカのジョージタウン大学で日本

の歴史と文化を教えていたのですが、去年から國學院大學に所属しています。

私は観光まちづくりの専門家ではありませんので、一步離れたところから「観光」を考えたいと思います。文明開化の時代に岩倉使節団が世界一周をし、帰国後に記した報告書である「米欧回覧実記」に「観光」という文字が登場します。

当時一般的ではなかったこの言葉を岩倉具視が使った理由は記録にはありません

が、岩倉は3つの意味を込めたとは私は考えています。一つ目は「学び」。二つ目は「自分の国を変えること」。三つ目は、「自分と世界の関係を変えること」。観光の原点に立ち戻ると、観光の本質を考える示唆があるのではないかと思います。では、3人のお話の感想とそれぞれ質問をさせていただきます。

井澤さんのフットパスのお話は、イギリスの田舎町の散策を思い起こしました。歴史や人々の営みが景観に刻まれていることなど共通点を感じます。これから道の歴史を何らかの形で読み取れるような施策は考えられないのでしょうか？

川口さんのお話からは「雨月物語」という古い映画を思い出しました。琵琶湖は日本の交通史では非常に重要な場所であり、人間と自然環境との関係を考える上でも重要な場所です。

ここで地域の文化を深く味わってもらう企画として、棚田オーナー制度を実施されていると聞きました。このことについてもう少し詳しくお話を聞かせてください。

吉川さんのお話では、市民が黒塀を再生し、町屋が変わり、地元の人々が町並みをつくり直すことにプライドを持つ姿が印象的でした。城下町の歴史にも興味がありますが、城下町の日常生活や歴史を意識した企画はありますか？

使っている理由は？ やはりイギリスがきっかけからでしょうか？

井澤…「まち歩き」とか「〇〇ウォーク」だとみんな思いますが、「フットパス」はまだ手垢がついていないように思ったからです。

農家と協力して進める 棚田オーナー制度

西村…次は川口さん、棚田オーナー制度についてお答えください。

川口…棚田オーナー制度は全国的に取り組まれていると思いますが、大津市でも2〜3カ所で行われています。我々のプログラムでは、田植えから収穫、天日干し、脱穀など一連の作業をすべて経験してもらいます。

コロナ禍になって農家の人たちから「農村ツアーを語るなら、実際に体験してからにすれば？」と声をかけられ、それをきっかけに棚田の活動に参加しました。

コロナ禍において、世界中で自然に回歸する動きがあり、キャンプ場や山への訪問だけでなく、棚田も注目されました。地元である滋賀県からだけでなく、京都や大阪、和歌山などからも参加者が訪れ、新たな棚田オーナーが募集されるほどの盛況ぶりです。

この活動を通じて、地元の農家との関係を深め、将来的な食料不足に備えて自給自足の力を身につける重要性を感じています。

西村…棚田オーナー制度でつくったお米は、参加者がもらえるわけですね？

川口…はい。参加者が受け取ります。西村…例えばこのオーナー制度を外国人はどのように思われるのでしょうか？

フットパスを通じて 地域の歴史や文化を理解

西村…それではそれぞれ1問ずつ質問がありましたので、お答えください。

井澤…フットパスを始める時にイギリスの行政の方からは「日本にはフットパスがないのでは？」と言われました。イギリス的な「フットパス」＝「歩けない道」が日本ではほとんどなく、集落の道は地域の人々が管理しているので、大体どこでも歩けますと答えました。

地域を歩いていると、歴史的な追分の碑があり、右も左も上段が平仮名で下段が漢字で書かれています。平仮名と漢字を書き分けられているのはなぜだろうと、碑の歴史を考えるきっかけとなり、歩く楽しみが増えます。

まちを歩くことで、昔の土木工事や町割りの様子が実感でき、地元の歴史や地名の由来などがわかります。子どもたちもフットパスを通じて地域の歴史を学んでいます。

西村…地域の歴史が徐々に明らかにされるプロセスは、地域の人へのヒアリングによって進んでいるのでしょうか？

井澤…きっかけは地域の人ですが、郷土史家の知見にも頼っています。

西村…調べると深い発見があるということですね。「フットパス」とカタカナを

サンド…今、初耳でちょっと驚いています。海外のオーナー制度は、一つの棚田に対して複数のオーナーがいて、何らかの形で支援し、投資をする。その見返りとして収穫の一部をもらうというものです。そうではなくてオーナーになった人が1年間、田植えも草取りも、収穫も、最初から最後までやるということですね。すごい企画ですね。

西村…全部オーナーがやるわけじゃなくて、農家の人に教わりながらです。つまり、自分で育てて、それが実るのを実感し、心が豊かになる経験だと思っています。

城下町ならではの 町屋を見せるツアー

西村…では続いて、吉川さん、お願いします。

吉川…城下町には、町人地区と武家地区があり、その一角には寺町も形成されています。町屋には、狭い間口と奥行きのある庭があり、村上では中庭と呼ばれています。しかし、これらの庭の多くは残っていないため、町人地区だけで庭を見せようとしても魅力は薄いです。

一方、寺町には素晴らしい庭がありますが、和尚さんが見せてくれないことが多いです。

武家地区は商店もなく行政も関心なかったのですが、素晴らしい借景の庭を持つ家がいくつかあり、これらを見せてもらいたいと動き始めました。すると、これまで断られてきたお寺も庭を見せてくれるようになりました。

庭を見せてもらえるところが増えると、武家地区に光が当たり、協力してくれる人も増えてきて、率先して清掃し、





- ① みんなで一緒に餅つきができる
- ② 日本の原風景ともいえる棚田が広がる／◎びわ湖高島観光協会
- ③ 移住者たちが集まったというツールドラックのメンバー
- ④ 地元の人との触れあいを楽しめるツアー

地球環境問題も 観光業の持続には重要…川口氏

フォーラムのテーマの一つにもなっていますので、今から30年後の自分の地域がどうなっているかを最後にお聞きします。

井澤…美里町に来た人たちは皆さん「すごく水がきれいだし、山の中ですね」と言います。私たちにとっては、もともと奥の方が山だと思っていたのに、外から来る人は空港から40分のところでも「山の中」と感じるようです。それなら、いつのまにか山に来ているというこの良さを生かそうと考えるようになりました。

美里町には石橋が35残っていて、「なぜそんなに残っているのですか？」とよく聞かれますが、それは工場の誘致もなければ、団地の住宅もできない。開発の手が及ばなかったので残ったのです。

10年前にフットパスという言葉を地域の人に伝えたいと思って、フットパスの全国大会を開催しました。来年は自治体や団体、県境を越えた4つの町村と日本



- ① 美里町の名所「♡が現れる二俣橋」
- ② 最高のおもてなしは地元の人の笑顔
- ③ 美里町らしい食材を集めたフットパス弁当
- ④ コースは地元の山の中や畑の脇道

観光と言わないまちづくり 地域が連携して認知拡大…井澤氏

まちがきれいになっていきました。オール城下町で庭をテーマにした新しいイベントも開催され、地元の人々や観光客がまちを新しい視点で楽しめるようになりました。

地域づくりは10年かかる 続けるには覚悟が必要

西村…パネリストの方で何か追加コメントがあれば、いかがでしょうか？
井澤…美里町に川口さんみたいな人が近くに来てくれたらいいなと思いました。外国人が来ないわけじゃないし、日本語のマップしかないのにすごく満足してくれます。ですので、ここに送り込んでく

れる仕掛けができる人が欲しいです。

西村…川口さんは大津市だけでなく、もつといるところに貢献できるのではないかという質問ですが、どうですか。

川口…私自身が行くのは難しいですね。先ほど井澤さんが10年とおっしゃっていましたが、私も同じで2014年に始めて、来年で10年になります。最初の2、3年は全く鳴かず飛ばずで、少しずつ反響が出てきて、いい感じで行くかなと思ったら、コロナ禍になって2年半全く活動ができず、ようやく再開ということで丸10年を迎えようとしています。

私も補助金に頼ることなく全部自費でやってきました。一昨年観光庁の事業を、何も収入がない時に受けましたが、そのご縁で今回こうやってお招きいただきました。それを除けば補助金はゼロでしたので、非常に厳しかったんです。となると、そういう我慢ができる人でないと地域で実践するのは難しいと思います。

大都市のように、ヒトもカネも多く集まる場所ではなく、厳しいけれど地方に行って、自分なりの新しい表現とか、プレゼンテーションの方法で取り組みたいという人は、きっといるはずですので、「強者求む！」みたいなことをやられて、ご縁ができると思いますね。

予測不可能なリスク 観光業の脆弱さが課題

西村…先ほど、コロナ禍の話がありましたが、特にインバウンドだとはいえませんが、止まりますよね。それはすごい恐怖です

フットパス協会が連携して全国大会を開催する予定ですが、

西村…ある意味、20世紀の開発を避けることができた山の中だからこそ、21世紀に可能性を秘めているのですね。

地域連携が持続のカギ 心の安寧を求めるツアーも

川口…私は会社を経営しているため、地域という大きな視点で語るのは難しいので、自分の会社が30年後にどうなっているのかという視点でお話をさせていただきます。

リスク要因としては地政学なこと、戦争や地球環境問題、南海トラフ地震などさまざまなあり、その中でどのように対処すればよいのか考えます。東北や熊本で震災がありました。皆さんそこをたたくまじくはい上がって生きていく姿を見ると、生き残った者同士が新たに連携し、助け合って生きていくことが大事だと感じます。

今、滋賀と京都の県境にある比叡山延暦寺で大変厳しい修行をされた阿闍梨様と一緒に山を歩こう、回峰行の道を歩こうというツアーを企画しています。

阿闍梨様のツアーをなぜ企画したかと言いますと、こうした混沌とした時代の中で、人々は心の安寧を求め、自然回帰や山からの靈気を体に取り入れて、一歩

よね。

川口…そうですね。不安でした。西村…その直後、また急に戻ってくる。予測不可能な不安に対してどう対処すればいいのでしょうか。

川口…本場にそこは課題です。コロナ禍だけに限らず戦争や国の政治的な動乱にも影響されます。

また、悩ましいことが二つあり、その一つが地球環境問題です。このまま飛行機を飛ばして、今のような暮らしをしたり、ぜいたくな観光を続けたりすることが良いのかというモヤモヤした気持ちがあります。

もう一つは、南海トラフ地震。今後10年以内に来るのではないかといわれています。そんなことも考えながら継続するのは難しく、観光業はちよつと脆弱なところがある業界だと思っています。

来てほしいお客様を選ぶ まちの品格に必要な視点

吉川…さつき川口さんが「良いお客様を迎えると、お客様の品がまちの品格になる」というお話をされていました。私も本場にそうだと思っています。「町屋の人形さま巡り」を始めた際、ツアー客を招くことは避け、個人客を対象にしていました。

しかし、うわさを聞き付けてバスツアーが来るようになり、失礼な態度をとる人が増えてしまいました。この経験から、激安ツアーは組んではいけない。質の高いお客様を迎えるまちにするように努力しなければいけないと学びました。

西村…「人形さま巡り」も、「屏風まつり」もお金を取っているわけじゃないんですよ。何とかしてお金が回る工夫をしな

を踏み出していこうと考える人が増えてくるように思っています。

何かしら大きな出来事が起きた後に、人の気持ち不安定になったら、神仏に拜んで目に見えないものにすがりたいという、そういう気持ちを汲み取ったツアーを組んで、一緒に祈りながら歩いていくことができたらいなと思っています。

蓄積される文化がつくる 歴史のまちの価値

吉川…歴史のまちでうらやますべきまちに長野県の妻籠があります。日本を代表する町並みを持っている妻籠の方が村上に來られた時に、「村上がうらやましいですね」と言われたことが衝撃的でした。

「何がうらやましいのですか？」と聞くと、妻籠は宿場町の性質上、時代の変化や流行に対応していくために、そこに蓄積される文化がないとおっしゃるのです。村上にはお茶や鮭料理の文化、お祭りもあり、城下町ならではの積み重ねられてきた文化があると言われた時に、そのまちの財産というのは古い建物や町並み以外に文化というものもあり、これが本場に大切なのだなと感じました。それがまちの個性を形成しているのです。

同時に若い人たちが、私たちが考えなかったような、新しい角度からまちを良くしようとする活動を始めます。自

いと続けられないですよ。

吉川…各家庭が様々な工夫をしています。1回の開催費用は30万〜35万円がかかりますが、経費を極力抑えつつ、多くの人が訪れることでまちが活気づきます。

これらの費用を捻出するため、行政に頼らずに自力で行うことを目指しています。最初は写真集を制作し、その売上金で活動継続の費用に充てられました。

持続可能性を考え、1回のイベントに大金をつぎ込み過ぎないようにしています。お金の切れ目がイベントの終わりになりますから。極力少ない費用で継続できるようにしています。

当初は行政に頼らずに 自分たちで費用を捻出

西村…行政が補助金を出しているわけではなく、写真集を売って運営しているという、その仕組みがうまく機能していることが驚きです。

吉川…クラウドファンディングという言葉がない時代でしたが、村上出身の数千人の高校の先輩たちにまちの再生への協力を求め、年会費形式での会員登録を行いました。これにより毎年約300万円が集まり、補助金を出す仕組みをつくりました。

68軒の町屋が再生されましたが、45軒を過ぎたところ、市は近代化計画から歴史を活かしたまちづくりに180度方向転換したのです。そして今度は市が自ら町屋再生の補助金制度をつくりました。

30年後の地域の姿 持続可能性を求めて

西村…サンド先生、何か質問があれば。サンド…「持続可能性」というのがこの

分たちではできないような考えを持った若い人たちの取り組みを応援していくのがこれからの役目であり、30年後に向けて若い人たちを育てていきたいと思っています。

西村…地域は人を育てる器です。魅力的な器に人が集まり、人が育つ。私たちの観光まちづくり学部の使命は、その器に人を送り込むことです。そういう人材を育てたいと思っています。

本日は、ありがとうございました。

(文責…楓千里)



- ① ② できることから始めて広がっていった黒堺プロジェクト
- ③ 町屋の中で見せるからその雰囲気味わえる屏風まつり
- ④ 町屋を再生していき、まち全体の風景も変わっていった



30年後の未来に向けて
若い世代を育てたい…吉川氏

「TOD(公共交通主導型開発)による サステナブルな田園都市」

開催日: 2023(令和5)年10月11日 講師: 太田 雅文氏 東急総合研究所 フェロー・主席研究員

第8回の観光まちづくりカフェは、東急総合研究所の太田雅文氏を講師としてお迎えした。

第1部の太田氏の講演では、都市開発と鉄道の関係について、特に東京大都市圏における鉄道網の役割とその進化が詳細に論じられた。東急電鉄が田園都市線沿線を開発したことで、鉄道が単なる移動手段ではなく、地域の発展を支える基盤として機能していることが示された。具体的には、田園都市線沿線のたまプラーザ駅周辺の区画整理や、二子玉川駅の玉川高島屋ショッピングセンターの設立が、都市開発と鉄道の連携の成功例として挙げられた。また、地域文化を活かした観光振興の必要性や、老朽化した地域の再生に向けた包括的な取り組みについても言及され、鉄道と都市が調和し共に発展していくための視点が強調された。講演全体を通じて、持続可能な都市開発

の重要性が改めて認識された。

第2部のトークセッションでは、西村幸夫学

部長のファシリテーションの下、太田氏に加え、椎原晶子教授、十代田朗教授、大門創准教授が参加し、都市開発と観光の関係について活発に議論が行われた。鉄道会社が地域開発にどのように貢献できるかについて、話題は多方面にわたり、東京一極集中の問題については、鉄道がこの集中を助長してきた一方で、地方分散を促進する可能性についても言及された。また、コロナ禍を契機に、地方でのワーケーションやコワーキングスペースの需要が高まる中、鉄道会社が地方の価値を高め、持続可能な地域社会の形成にどのように寄与できるかが重要な課題として提示された。

また、鉄道と観光の連携についても深く議論された。例えば、田園都市線沿線には観光地としての魅力が乏しいと指摘され、その改善策として歴史や文化を活かしたまちづくりが提案された。具体的には、大山街道沿いの宿場町や古い町並みを再評価し、観光資源として活用することが挙げられた。このような取り組みは、地域の歴史的・文化的価値を再発見し、それを現代の観光に結びつけること

で、観光地としての魅力を高めるとともに、地域のアイデンティティを強化するものとされた。

さらに、鉄道会社が持続可能な開発を目指す中で、経済的利益と社会的価値のバランスをどう取るかが議論された。鉄道会社が地域の発展に貢献するためには、単なる経済活動にとどまらず、地域の文化や歴史を尊重し、それを基盤とした新たな価値創造が必要であると指摘された。特に、渋谷の再開発プロジェクトにおいて、スカイデッキや緑道の整備が都市の持続可能性と居住環境の向上にどのように寄与しているかが具体的な事例として紹介された。

最後に西村学部長から、たまプラーザ駅周辺が、学生が集うお店が集積するようなまちになることへの期待も述べられた。対談全体を通して、地域の文化や歴史を尊重しつつ、新たな価値を創出することが、今後の都市開発や観光振興において重要なテーマであるなど、これからの観光まちづくりに対する多くの示唆が得られた。



「神社と伝統、神社とポップカルチャーとは何か？」

開催日: 2024(令和6)年2月21日 講師: 岸川 雅範氏 神田神社禰宜



第9回観光まちづくりカフェは、神田神社禰宜の岸川雅範氏を講師にお迎えした。神田神社は東京都心に鎮座し、江戸文化を引き継ぐ由緒ある神社であるが、昨今はアニメや漫画、ゲームといったポップカルチャーなども受け入れ、さまざまなコラボレーションを行っている。

岸川氏は、神田神社がアニメやプロレスとのコラボレーションを通じて、若年層や観光客を引き寄せる成功例を紹介した。特に、アニメ『ラブライブ!』や『シュタインズ・ゲート』との協力は、神社が伝統的な宗教施設である一方、現代文化との結びつきによって新しい観光資源となり得ることを示した。さらに、『シュタインズ・ゲート』のイベントでは、資料館とコンテンツツーリズムを結びつけ、神社とアニメファンが集う場としての役割を強調した。

また、神田祭の伝統についても触れ、現代のアニメ文化との関わりを「伝統の創造」と捉え、新しい文化と神社の歴史的価値が共存できる可能性を示唆した。

神田神社はアニメファンだけでなく、地域の歴史や文化に根ざした祭りを通じて、地元の人々との連携を強化し、持続可能な地域振興を目指している。

講演を通して、神田神社が新旧の文化を融合させることで、観光振興や地域の活性化に大きく貢献していることが示され、神社が単なる宗教施設にとどまらず、現代文化の発信地としても機能している点が注目され、今後の地域振興のモデルとして多くの示唆が得られた。

第2部は、吉見俊哉教授がファシリテーターとなり、岸川氏のほか堀木美告教授、石垣悟准教授によるトークセッションが行われた。

吉見教授は、神社が非日常的な空間を提供し、日常から切り離された場所として機能していることに触れつつ、その空間がどのように観光と融合しているかを掘り下げる必要性を強調した。さらに、日常と非日常の境界をまたぐ神社の存在が、現代の観光資源として重要である点を指摘し、現代文化との融合が神社の価値を高めるとともに、地域社会への影響も大きいことを示唆した。

岸川氏は、神田神社がアニメやポップカルチャーとのコラボレーションを通じて、観光資源としての新たな価値を生み出している点を強調した。アニメ『ラブライブ!』や『シュタインズ・ゲート』などの人気作品と神田神社のコラボレーションによって、若年層やアニメファンを引きつけ、絵馬にアニメキャラクターを描いて奉納する「痛絵馬」という現象

が生まれている。これは、神社が伝統的な宗教施設であると同時に、現代のサブカルチャーと融合して観光振興に寄与していることを示す例である。

堀木教授は観光の観点から、神社が地域社会の中で観光資源としてどのように機能しているかを解説した。神社は、非日常的な空間を提供し、訪れる観光客に特別な体験を与えることで、地域振興の一翼を担っていると述べた。特に、神田神社のように都市部の神社がアニメや現代文化と融合することで、若い世代や海外からの観光客を呼び込む成功事例を紹介した。

石垣准教授は民俗学の視点から、神社がもつ伝統的な役割について触れた。特に、江戸時代から続く絵馬の文化が現代のアニメ文化とどのように結びつき、進化しているかが議論された。かつては馬を奉納していたが、これが時代と共に木製の絵馬に変わり、現在ではアニメキャラクターが描かれるようになった。神田神社の例では、こうした伝統的な習俗が現代文化と融合し、観光客を魅了する新たな価値を生み出していると解説した。

最後に、吉見教授は、神社が地域の文化や歴史と現代の観光振興をつなぐ重要な役割を果たしている点を再確認し、今後の議論をその視点からも発展させるべきだと述べ、トークセッションをまとめた。



第8回～第10回「観光まちづくりカフェ」開催報告

2023(令和5)年10月から2024(令和6)年6月にかけて、計3回の「観光まちづくりカフェ」が開催された。

各地、各分野で活躍されている方から直接お話を伺いすることができ大変貴重な機会となった。

(講師の肩書・役職は当時のもの。文責:小林裕和)



「地方都市×観光×UR=サスティナブルなまちづくりへの挑戦 ～鹿沼(栃木)、福山(広島)での取り組みから～」

開催日: 2024(令和6)年6月26日 講師: 中條 由規氏 UR都市機構

第10回の観光まちづくりカフェは、UR都市機構、東日本都市再生本部事業推進部に所属されている中條由規氏を講師として招いた。中條氏はこれまで、バスターミナル東京八重洲、虎ノ門ヒルズ駅の事業組成や渋谷駅周辺まちづくりなどの都市再生事業に携わってこられた。中條氏は、ご自身の経験を基に、URの活動とその挑戦について詳しく語った。

まず日本が直面する人口減少と高齢化の問題に触れ、それが地方都市に与える影響について説明した。特に、空き家の増加と市街地の空洞化が顕著であると指

摘した上で、これに対してURは、地方都市の再生を目指し、空き家の利活用や新たな都市機能の導入を進めていると説明した。

具体例として、栃木県鹿沼市での取り組みが紹介された。鹿沼市は人口減少と空き家問題に直面しているが、URはこの地域で「鹿沼コモンズ」というコミュニティスペースを展開し、地域住民や新規事業者のサポートを行っている。また、空き家のリノベーションを通じて新たな賑わいを生み出す試みも進めている。

続いて、広島県福山市での事例が紹介

された。福山市では、新幹線駅前の再開発が進まず、多くの空き家と青空駐車場が目立つ状態だった。URは、地域のリノベーションを支援し、公共空間の有効活用を通じて賑わいを取り戻すプロジェクトを実施している。具体的には、道路を「ほこみち」として活用し、地域全体の魅力を高める取り組みが行われている。

中條氏は、これらの事例を通じて、持続可能なまちづくりの重要性を強調した。



サステナブルな都市再生には、単に物理的な再生だけでなく、地域の社会的・経済的な活力を取り戻すことが不可欠であると述べた。また、URの取り組みが成功するためには、地域住民や地方自治体との連携が重要であることを強調した。講演後の質疑応答では、学生や教職員から多くの質問が寄せられ、活発な議論が行われた。

第2部は、黒本剛史助手がファシリテーターをつとめ、会場の参加者からの質問や意見を中心に進められた。その中で、都市再生におけるパートナーシップの重要性が強調された。特に、地方自治体、民間企業、そして地域住民が一体となって取り組むことで、持続可能な地域社会の構築が可能であることが議論された。

福山市での事例では、ウォークアブルなまちづくりを目指して、公共空間の利活

用が進められており、道路や広場といった公共空間を活用し、歩行者にとって快適な環境を整備するための具体的な施策が紹介された。例えば、ほこみち制度を活用し、歩道にベンチやテーブルを設置することで、まち全体の魅力を高め、歩行者が集う空間を創出している。また、これにより商店街の活性化も図られ、地元の店舗と協力してイベントを開催するなど、地域全体の活力を引き出す取り組みが進められている。また、福山市の取り組みの中で特筆すべきは、地域の特性を活かした観光振興であると指摘された。具体的には、地元の歴史や文化を反映した観光プログラムの開発や、地域資源を活用した新しいビジネスモデルの導入が試みられ、特に、歴史的な建物を宿泊施設として再利用し、観光客に地元の文化を体験させる取り組みが成功している。



また、これらの施設では、地元の食材を使った料理を提供し、観光と地域経済の両立を図っているという。

中條氏の講演を通じて、地方都市の再生に向けた具体的な取り組みと、その中でURの役割について理解を深めることができた。鹿沼市と福山市の事例を通じて、都市再生と地域振興の新しいアプローチが示され、ほかの地域でも応用可能な多くの示唆が得られた。地方都市の抱える課題に対し、持続可能な方法で解決を図るURのアプローチは、ほかの地域や組織にとっても参考になるだろう。

地域連携最前線

連携Ⅰ

鳥羽の魅力を発信する「鳥羽うみライブラリー」を開設

地域マネジメント研究センター 研究員 大隅 一志

2024年3月、三重県鳥羽市は、中心市街地の既存施設内5カ所に、鳥羽や海に関する書籍を置いた「鳥羽うみライブラリー」を設置しました。海と深く関わる自然や歴史、産業、生活文化などを特徴とする鳥羽らしさⅡ「鳥羽うみ文化」を市民や観光客に感じてもらうとともに、市民の居場所づくりや観光客との交流機会の創出を目指しています。

さらに点在するライブラリーを巡ることで、鳥羽水族館やミキモト真珠島などが立地し観光客が集中する海側のエリアから、空洞化が目立つまちなかへの回遊を促すことなどを狙いとしています。

この取り組みは、「鳥羽うみ文化」の継承と創造を目標とする「第二次鳥羽市観光基本計画」の後期アクションプログラム（2022年3月策定）のプロジェクトを受けたもので、2022年度は同市の補助金を活用して本学が調査・検討を行い、

2023年度に「鳥羽うみ文化と公共交通を活かした拠点と賑わいづくり事業」として市が事業化しました。

この事業は、鳥羽市、鳥羽市観光協会、鳥羽なかもち会が実施主体となり、本学や芝浦工業大学が連携して取り組まれました。本学は、主にライブラリーのテーマ設定や書籍の選定・分類、管理方法等に関する調査・指導を担当し、特に中之郷駅への「えほん館」の設置では、駅に近く昭和の町並みが残る「鳥羽なかもち」地区で空き家のリノベーションなどに取り組んでいる芝浦工業大学の建築を学ぶ学生団体（鳥羽設計室）が本棚や椅子の設計および制作を担当しました。

「鳥羽うみライブラリー」はまだ始まったばかりですが、民間施設からの参画希望もあり、今後さらに市民や観光客に「鳥羽うみ文化」が広まり、交流や中心市街地への回遊が促進されることが期待されています。

連携Ⅱ

産官学共同研究プロジェクト始動―栃木市「蔵の街」を中心に―

教授 石本 東生

2023年5月16日、栃木市・東武鉄道株式会社・東武トップアーズ株式会社・本学部の4者間にて共同研究協定「持続可能な『観光まちづくり』に関する調査研究―栃木県栃木市を例にして―」が締結され、取り組みがスタートしました。

本研究は、参画する4者の連携により、栃木市「蔵の街」を中心に、まちなかの歴史的建造物を保全しつつ、新たな視点での活用と付加価値の創造を促し、持続可能な観光まちづくりを目指す試みです。

研究初年度は、9月半ばに蔵の街、翌年1月下旬には都内台東区谷中においてフィールドワークを実施。2023年度末に取りまとめた報告書では、「歴史的資源を

活用した観光まちづくり」に関するテーマで、メンバーより以下のような多様な研究成果や提言が発表されました。

● 千葉県香取市佐原地区や埼玉県川越市における、地域の歴史文化、町並み、食、伝統工芸などを上手く取り入れた地域全体の活性化策

● 福井県小浜市「まちづくり小浜」DMOのまちづくりの「司令塔機能」と観光コンテンツの「開発機能」に関する事例

● 台東区谷中地区の老舗喫茶「カヤバ珈琲」の再生と、観光客のみならず地域住民のニーズに細やかに応えることで新たに生まれた地域の人々との絆

● 栃木市所有で活用中の建造物、同市内の未利用物件、台東区谷中の歴史的建造物保存活用例より、①サブリース方式、②管理運営協力、③自主事業運営、④その他のコーディネート・支援、という4スキームの運営法分析と整理

これらの事例研究を基に、栃木市の観光まちづくりへの適用性を考察しています。

このように本研究の特筆すべき点は、本学教員のみならず、栃木市および東武グループのメンバーが多様な視点から地域分析をおこない、「蔵の街」に適した持続可能な観光を多角的に探っていくところにあります。



うすまがわ 巴波川と蔵の街（塚田歴史伝説館）



「鳥羽うみライブラリー」案内MAP（鳥羽市作成）

鳥羽商工会議所との共同研究

教授 小林 裕和

2023年度、本学部は鳥羽商工会議所との共同研究「鳥羽におけるサステナブルツーリズムのあり方についての基礎研究」を行いました。同会議所観光部のメンバーである宿泊事業者とワークシヨップを2回開催、その成果は「サステナブル鳥羽」において、「海とつながる体験を楽しむ7つのヒント」として鳥羽市商工会議所のHPで紹介されています。

「蔵の街」をフィールドとして基礎ゼミを実施

栃木市「蔵の街」では、本共同研究と連動して「基礎ゼミナールA」授業におけるフィールドワークを2022年・23年の8月に2年連続で実施。本授業では1クラス12名（×2クラス）の履修生が「蔵の街」を視察し、個人研究発表をおこなっています。フィールドワーク直後に実施した履修生へのアンケートでは、2年連続で最も高い評価を得たのが「かな半旅館」の昼食「小江戸料理」です。同旅館は、蔵の街大通りにて江戸時代から続く老舗旅館。女将の志鳥様からは敷地内の見世蔵より発見された江戸時代の大量の古文書が解読され、栃木・小江戸料理レシビの再生につながったという秘話も伺い、地域の歴史発掘の重要性への気づきとなりました。

かな半旅館の小江戸料理



「蔵の街」での基礎ゼミ風景



連携Ⅲ

学生目線で丹沢大山エリアの魅力を再発見！

教授 堀木 美告

2023年5月25日、日本自動車連盟（JAF）神奈川県支部、神奈川県国際文化観光局（2024年4月1日文化スポーツ観光局に組織改編）観光課、本学部の三者は「産学官共同・連携事業の実施に関する覚書」を取り交わしました。地域観光の発展に資することが狙いで、神奈川県下でも多くの自治体が共通して抱えている「地域の埋もれた魅力に光を当てたい」「フレッシュな視線で地域の魅力を掘り起こしたい」との思いを背景に、丹沢大山エリア（厚木市・秦野市・伊勢原市・愛川町・清川村）を対象として学生独自の視点で魅力再発見に取り組むこととなりました。

第一段階のワークショップ（2023年9月）では、対象地域の観光の現状把握やSNSでの情報発信のためのハッシュタグ考案などの学びの後に、15名の学生が4グループに分かれて対象地域を訪問し、独自の視点で地域資源の発掘を行いました。フィールドワーク後の座学では写真をもとに対象地域の魅力について整理するとともに、それらの写真を活用したSNSでの情報発信に取り組みました。

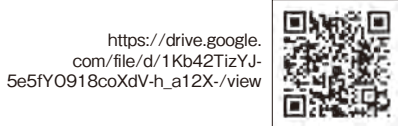
第二段階のワークショップ（2024年2月）では、JAF神奈川県支部が実施した「か

ながわ魅力再発見フォトコンテスト」と連動する形で対象地域の魅力を広く発信するデジタルパンフレットの作成に取り組みました。パンフレットのタイトル決定や各ページのデザイン、写真に付すコメントの用意などの流れを体験し、これら成果物をウェブサイトで広く公開することの意味について考える機会にもなりました。

本学部の学生は地域資源の発見・発掘に取り組む機会が多いものの、その情報発信にまで関わる機会はまだ限定的なため、参加した学生の満足度は高く、こうした情報発信への関心の高さも窺い知ることができました。2024年度は対象地域を変更するとともに、演習科目「基礎ゼミナールA」の枠組みも利用する形で取り組みを継続する予定です。地域資源の発掘にさらに広く寄与し、学生の実践的学びが一層深まることが期待されます。



かながわ魅力再発見デジタルパンフレット（一般社団法人日本自動車連盟HP）



学内でのワークショップの様子

「観光まちづくりライブラリー」

たまプラーザキャンパス「若木21」1階のCMI内にある「観光まちづくりライブラリー」では、本学部における学びおよび観光まちづくりに関する専門図書・資料を収集・保存し情報提供しています。本学部の資料室にあたりますが、「ライブラリー」と名付けられているとおり、大学の図書館と同じように自由に図書や雑誌を閲覧することができ、資料の貸出サービスや資料相談（レファレンス）にも対応しています。

観光まちづくりは、社会、資源、政策・計画、交流・産業など幅広い領域に関わっています。ライブラリーでは、こうした特性を踏まえて蔵書を独自に分類し、専門かつ重要な図書約3000冊、専門雑誌約120誌を揃えています。

本学部ならではの蔵書（コレクション）の収集とともに、観光まちづくりに関わるさまざまな情報や地域とつながり、アクセスしやすい情報図書館を目指して機能とサービスの充実を図っていきます。

利用案内

◆利用できる方

国学院大学の学生・教職員

◆開館時間

平日10～17時

通年開館（土日祝日は休館）

*大学の夏休み、年末年始、春休み期間等は一部休館する場合あり

◆資料の閲覧・貸出

・ライブラリー内での閲覧は自由

・貸出は同時5冊／人まで

*禁帯出資料（辞典・事典・統計・白書等）、一部の雑誌、地域情報誌等はライブラリー内のみ閲覧可



観光まちづくりライブラリー

<https://www.kokugakuin.ac.jp/education/fd/tourism/about/library>



温かみのある飛騨家具



企画展示例（日本の誇る文化資源・自然資源）



第11回ふるさとパンフレット大賞受賞作品の紹介

本学部教員陣による2冊目の図書を刊行！

『観光まちづくりの展望 地域を見つめ、地域を動かす』

西村幸夫＋国学院大学地域マネジメント研究センター 編
石山千代〔ほか〕著

学芸出版社、2024年2月 283P
ISBN: 9784761528812

2024年2月、『観光まちづくりの展望 地域を見つめ、地域を動かす』が学芸出版社より刊行されました。

これからの観光まちづくりのあるべき姿を、①地域の個性をみつけ、みがく（環境）、②地域の多様なつながりをつくり、活かす（社会）、③地域の暮らしを支え、豊かにする（経済）、④地域の未来をつくる人材と仕組みを育てる（人材と仕組み）の4つの柱から読み解き、現場でこれらがどのように統合され実践されているかを紹介しています。

地域に軸足を置いた「観光まちづくり」の実践を目指す本学部の特色とその考え方が理解できる一冊です。





観光まちづくり学部

専任教員紹介

この学部には、さまざまな分野での研究実績や現場経験を持つ教員がそろっています。学生自身の興味関心に合う専門分野を有する教員の下で、学べるのが本学部の特色の一つです。教員が今、興味を持っていること、取り組みたいことについてコメントしています。



小林 裕和 教授
KOBAYASHI, Hirokazu
観光学、
観光イノベーション、
観光DX、持続可能性

仏の美術評論家ルロワが酷評した、のちにそう呼ばれる第1 回印象派展が開催されたのは今からちょうど150年前の1874 年でした。印象派画家は自分たちの時代を描き、産業として確立したレジャーの地を風景として描く中でその近代性を発見したと、オルセー美術館で説明されています。ゴッホの有名な「黄色い家」には煙を吐く蒸気機関車が描かれています。ツーリズムが大衆化する19世紀後半、ゴッホが鉄道を描いた動機に想いを馳せます。



小林 稔 教授
KOBAYASHI, Minoru
民俗学、文化財保護論

文化財保護という制度。その根底にある思考法とは何か。簡単にいえば「将来に繋げるには、この先どうしていけばよいのか」に他なりません。なかでも、祭りや行事を中心とする無形の民俗文化財は、そもそも折り重なった人びとの関係性で成り立つことから、それ単体のみならず、地域総体の文化としての方向性を模索しないわけにはいきません。そうしたなかで今思うのは、当事者としての自覚を如何にして持つべきなのか、ということです。



椎原 晶子 教授
SHIHARA, Akiko
都市計画、
建物保存再生、
エリアアート

令和6年度より専門ゼミが始まりました。学生たちと一緒に、谷中、三浦、横浜、小田原、小諸など、地域の方が長年まちづくりに取り組む地区に入り、一緒に活動する中から、地域に根ざしたまちづくりの実践と研究を進めます。まちの魅力、いいところ、まちづくりのたねの発見を地域に伝え、古民家再生のプロセスへの参加、アート活動による交流と創造の場づくりを通して、個人の活動の重なりから魅力あるまちができることを体験します。



塩谷 英生 教授
SHIOYA, Hideo
観光統計、観光経済、
旅行市場分析

専門としている観光統計や観光経済は、とても大切な分野だと思っていますが、どうしても難しい話になりがちです。学生にとってわかりやすい筋立てにすることや、役立つ話していくことに取り組んでいきたいです。研究活動では、科研費の枠組みで地域経済に貢献する宿泊事業について研究中です。域内資本の活用や外資のコントロールの方策について内外の事例から学んでいます。旅行市場の動きについても発信を続けていきたいです。



下間 久美子 教授
SHIMOTSUMA, Kumiko
文化財保護、
集落町並み保全、
文化的景観

現在の一番の関心事は、オーバーツーリズムが伝統的な集落や町並みを壊すメカニズムです。オーバーツーリズムの影響は、ゴミ問題や交通渋滞等としてよく紹介されています。それだけではなく、観光産業により儲かる者と儲からない者との格差を広げ、或いは、地元のルールを守る者と守らない者との意識差をもたらし、地域社会を内側から崩していく状況も見受けられます。地域の自然や歴史、文化の理解という視点から、粘り強く、この問題に対処していきたいと思います。



楓 千里 教授
KAEDE, Chisato
地域の観光情報
メディア

2024年2月現在、全国に1213カ所設置されている「道の駅」。休憩機能、情報発信機能、地域連携機能を基本コンセプトとして1993 年に「道の駅」制度が創設されて以来、地域と共につくる個性豊かなにぎわいの場として、多くの方に利用されています。観光の目的地としてさまざまな施設を併設する「道の駅」が最近の傾向ですが、地域の「観光まちづくり」の拠点としての役割を担っている「道の駅」の取り組みに注目し、関心を持ち続けたいと考えています。



嵩 和雄 准教授
KASAMI, Kazuo
地域計画、移住・定住、
都市農村交流

学生時代、アイルランドの農家民宿で旅をしているアメリカ人グループと出会いました。19世紀からのアイルランド移民の子孫が祖先の歴史を追いかける「ルーツをたどる旅」の最中でした。現在、地方創生の文脈で関係人口づくりが課題になっていますが、「縁のある地域」への関わりをつくるという点では、ルーツをたどる旅はその第一歩でしょう。ふるさともたない若い学生たちにもぜひ経験してもらいたいと思います。



金 今善 准教授
KIM, Guemsun
地方自治論、
市民参加論

私が今熱心を寄せているのは「多文化共生のまちづくり」と「エンパワーメントコミュニティ」の実現です。異なる文化や背景を持つ人々が手を取り合い、一緒に成長できるまち。そんな場所をつくることに携わりたいと思っています。人と人が互いに支え合い、多様性が輝くコミュニティを育んでいくこと。それが、私たちのまちに新しい息吹をもたらし、訪れる人々にも、ここに暮らす私たちにも、大きな喜びを与えてくれると信じています。この興味を軸に、皆さんと一緒に学び、考え、行動していくことができれば幸いです。



黒本 剛史 助手
KUROMOTO, Takeshi
都市計画、建築学、
町並み保全

地域の個性を見つけ磨く観光まちづくりの営みにおいて、町並みを形成する歴史的な建築物は重要な手掛かりになります。それらがさまざまな事情で失われつつある中、公共的主体が建物を取得することで保存し、民間のノウハウで活用する公民連携が進んでいます。近年は特に宿泊や飲食など「稼ぐ活用」が要請されますが、私はそこにメリット・デメリットがあると感じており、全国で模索されている公民連携の在り方を明らかにしたいと考えます。



児玉 千絵 専任講師
KODAMA, Chie
都市計画、都市デザイン、
ストックマネジメント

各地で人口減少に伴うインフラの維持管理が課題になっています。水道や鉄道等、インフラの維持には莫大な費用が必要ですが、一方でインフラ更新は地域構造再編の好機でもあります。例えば廃線予定の鉄道駅周辺整備や、自動運転・シェアモビリティ等の新しい交通結節点づくりを、日常的な賑わい創出、防災対策、地域の魅力発信の拠点づくりとして捉え、地域の空間デザインやマネジメントに活かしていくことに関心があります。

地域に伝えられてきた祭りの成り立ちや特色を捉える方法を改めて検討中です。実際の祭りを要素分解し、各要素をこれまで蓄積されてきた膨大なデータと比較することで、文字資料がほとんどなく、わからないことの多い祭りの成り立ちや特色を明らかにしたいと思っています。また、そうして把握された成り立ちや特色を、博物館などを利用して祭りの担い手や地域に還元し、祭りを次世代に継承するという実学的課題にも取り組んでいます。



石垣 悟 准教授
ISHIGAKI, Satoru
民俗学、博物館学、
文化財保護論

私は、南欧ギリシャに長く滞在し、帰国後は同国の在外政府機関で観光政策にも関与していたことから、現在もギリシャ・エーゲ海地域を研究フィールドとしています。一方、近年はギリシャを含むEU の国々における農村や海浜地域の持続的な観光発展と、それを支える公的支援の枠組みも研究しています。EU域内における過疎地域が、とりわけ「地域特性に根差した観光化」により、緩やかな発展を遂げているのが興味深いです。



石本 東生 教授
ISHIMOTO, Tohsei
欧州の観光政策、
文化観光

今年度始まったばかりの専門ゼミのことを最近よく考えています。各自の素朴な「なぜ？」と地域の現場を大切にし、ゼミがよき切磋琢磨の場となるよう、皆さんと楽しく模索中です。研究は、「地域らしさ」を守り育てていくための地域ならではの仕組みを相変わらず探究中で、いくつかの地域で実際の計画や取組にも携わらせていただいています。特に最近では、観光や開発、災害が「地域らしさ」の根底に及ぼすさまざまな影響に着目して、危機感と使命感を持って向き合っています。



石山 千代 准教授
ISHIYAMA, Chiyo
地域デザイン、観光計画、
歴史的環境保全

私は、デジタルメディアが創り出す現代的なコミュニティの在り方に関心を持っています。デジタルメディアはローカルなつながりを弱めると考えられがちですが、私が研究している移民とメディアの分野では、むしろ移民がインターネットを駆使して家族史を探求したり、遠くの故郷の行事に参加したりと、ローカルなつながりを強化する場面があります。そのような新しい「ローカル」の在り方は観光まちづくりに通じると考えています。



稲葉 あや香 助手
INABA, Ayaka
社会学、文化人類学、
メディア文化研究

一番の関心事は「断捨離」です。断捨離とは、「モノを捨てることで、『心』を整える方法」だそうです。いかにすっきりとした簡素な暮らしができるか、もう捨てるモノがないというのが究極の目標となります。が、私の場合、あまりに煩惱が多過ぎるのが「捨てられない……」。何でも取っておくのは成年生まれのせいかもしれないと言い訳ばかり。25 年住んだ自宅のリフォームをきっかけにこの一年間、身のまわりの「断捨離」とこれまでの研究・実践の整理に挑戦してみたいと思います。



梅川 智也 教授
UMEKAWA, Tomoya
観光地経営、
観光計画、観光政策

今年の元日に「令和6 年能登半島地震」が発生し、改めて自然災害に備える防災・復興まちづくりの必要性がクローズアップされました。日本は、美しい自然と歴史文化に恵まれた地域が数多くありますが、日常時の豊かさは災害時の危険と背中合わせて成り立っています。地域の歴史文化を活かした持続性のある観光まちづくりのために、日常時のみならず、災害時に備える防災・復興まちづくりの研究を継続していきたいと考えています。



浅野 聡 教授
ASANO, Satoshi
都市計画、景観計画、
防災・復興まちづくり

少子高齢化先進国に必要とされるイノベーションの方法論を研究しています。これまで正三角形人口ピラミッドを前提に経済や社会保障は成り立ってきましたが、逆三角形になった時、2,000 兆円を超す個人金融資産の世代間移転や消費の促進を図らねば将来不安が増すばかりです。そのために観光まちづくりの果たす役割があると思います。学び、働く世代の活動に贈与や投資をしようと思う社会をいかに作り上げていくかに興味があります。



井門 隆夫 教授
IKADO, Takao
観光経営論、
観光マーケティング



楊 恵亘 専任講師
YANG, Hui-Hsuan
都市保全、
都市デザイン、
ランドスケープデザイン

私は今、台湾台南市における歴史的まちづくりや歴史的環境と文化芸術に関わる動向について興味を持って、研究をしています。台南市は台湾の中で最も古い都市であり、今年400周年を迎えます。歴史の基盤の厚みがある台南市の上に、都市行政および文化行政それぞれの施策で都市のハード面・ソフト面の豊かさをつくり上げ、民間団体も活発な活動で台南市の創造的環境の創出を支えています。この一連の動きをより詳しく知りたいと考えています。



吉見 俊哉 教授
YOSHIMI, Shunya
社会学、都市論、
メディア論

東京の街歩き。街歩きとは、タイムトラベラーになること。都市は「現在」という単一の時間で覆われているように見えながら、実は異なる時間の層が折り重なる場所です。21世紀のまちづくりとは、そんな異なる時間を対話させ、過去を未来として蘇らせることだと思います。そんな思いで、東京の都心北部と南部を歩き、『東京裏返し』という本にまとめましたが、この作業の延長線上で、日本全体の「裏返し」も可能なはずです。



米田 誠司 教授
YONEDA, Seiji
公共政策、滞在政策、
観光食マネジメント

地域に滞在するということをあらためて考えています。自宅でも職場でもなく、いつものサードプレイスでもない、しばらくの間気持ちよく滞在できるような地域です。そこでは地域の人たちとほどよい距離感で関わりながら、でも居心地のよい自分の居場所も持てる、そんな地域のあり方を考えています。そのような滞在はもう観光ではなく短い生活なのですが、そうした地域での交流や滞在の食の形からも、新しい価値が生まれてくると考えています。



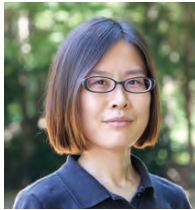
劉 銘 助手
LIU, Ming
造園学、風景計画学、
ランドスケープデザイン

近年、中国では「文化旅遊(カルチャーツーリズム)」が注目され、中国人が訪問先の歴史文化に対する興味・関心の増加は明白になりました。その中で、建築・都市計画の専門家や実務者をはじめ、人々は歴史的町並みや伝統的建造物・日本庭園に専門的な解説を求めるようなニーズも増えております。私は今年度は、そのような専門家向けの見学ツアーの日本庭園コースを担当し、中国人にとっての日本庭園ならではの魅力と、その伝え方を考えます。



ジョルダン・サンド SAND, Jordan
ジョージタウン大学教授・
國學院大学研究開発推進機構特別招聘教授
近代日本史、建築史

「歴史学」というと埃をかぶった地味なものに聞こえがちですが、自分の身の周りから出発して調べると実はどこも「歴史」だらけで興味が尽きない—そんな気持ちで、日常的なもののすべてについて「なぜ今ようになったのか」をいつも考えています。大学生として日本に最初に留学して以来、約40年間日本のまちの在り方や衣食住の歴史を調べてきました。



藤岡 麻理子 准教授
FUJIOKA, Mariko
文化遺産学、
歴史的環境保全

この数年、韓国と台湾で都市保全や都市計画の政策・制度等について調査を行ってきました。行政や専門家の方々にお話を伺っていると、両国と日本が互いの状況を実によく見合い、学び合っていることに気がきます。相手の方が進んでいると互いに思っていたりするのも面白く感じる場所です。相互に影響を及ぼし合いながら、それぞれがどう取り組みを発展させているのかは、わが方のありようを考える上で大いに刺激になります。



堀木 美告 教授
HORIKI, Mitsugu
造園学、観光資源論、
観光計画論

ヒトは何を求めて旅に出るのかという人間行動の領域と、心地よい空間や豊かな時間をどう提供するかという地域計画の領域に興味があります。前者ではコロナ禍で人々の移動が大きく制限された経験も踏まえ、あらためて旅先へ移動することの意味や価値について考えています。後者では自然風景地から里山、都市域まで多様な水辺の空間に人々の営みがどのように表れるか、それらの要素を地域個性としてどのように扱うかに関心を寄せています。



松本 貴文 准教授
MATSUMOTO, Takafumi
農村社会学、
地域社会学

むらの領域に関心を持っています。「むらの土地はむらのもの」という意識が、高齢化や人口減少が進んだ今日において、農村集落の機能を維持する重要な要因のひとつになっていると考えているからです。今年度から専門ゼミナールが始まります。受講生の皆さんと農村でのフィールドワークを実現したいです。



圓山 王国 助手
MARUYAMA, Oukoku
都市計画、多文化共生

埼玉県川口市の芝園団地をはじめとして、外国から来た住民が多く暮らす団地を対象に、背景の異なる住民同士がどのように接点を持ち、共に協力をして地域をよくしていくか、研究と実践の両方から考えています。観光まちづくり学部の一員として、自身の専門分野にとどまらず、さまざまな現場を訪れ、学生や教員と学び合いながら、学部理念「地域を見つめ、地域を動かす」を探究していきます。



山島 有喜 助手
YAMASHIMA, Yuki
風景計画学、造園学、
観光計画、都市緑地

学生時代から造園学・風景学の分野から屋上緑地を持つ都市の風景としての価値を考えてきました。観光まちづくり学部の先生方との交流を通じ、自分の興味の源泉が地域独自の風景や文化を見つけ出し、地域の皆さんと共有することにあると自覚しました。現在は地域の神社に関して風景学の立場から研究を進めているほか、博物館学芸員課程の担当助手として、博物館を核とする観光まちづくりについても考えていきたいと思っています。

学部の方で専門ゼミナールが始まることもあり、写真観賞が観光地における回遊行動に及ぼす影響についての研究に注力しています。データサイエンスの授業を受け持ったことで、あやふやだった知識が体系化されはじめて、研究にも使えるのだと手応えを持っています。研究はもちろんのこと、データ分析が有効と思われるタイミングで分析を試していきたいと思います。



仲野 潤一 専任講師
NAKANO, Junichi
AR/VR 等
インタラクティブメディア、
情報観光行動論

私の出身地は新潟県の豪雪地帯と言われた場所ですが、最近は年々雪が少なくなり、過ごしやすくなってきています。といったところですが、温暖化による気候変動などといった言葉で簡単にいい表せない危機を感じています。地球環境の異常がすぐ身近な所にまで迫ってきているからです。それに対して何ができるだろうか。生き方、働き方、そしてまちづくりの方法も変えて行く必要があると思っています。デザインの観点からも今の最重要課題と認識しています。



南雲 勝志 教授
NAGUMO, Katsushi
公共空間に於ける
プロダクトデザイン、杉を
用いたプロダクトデザイン

都市形成の物語を歴史文化を中心に描くこととその方法論を確立したいと考えています。そうすることによって、誰もが自分の住んでいるまちをより魅力的に見直すことができると思います。このことは観光まちづくりにもつながります。さらには、そうした物語を地域で複層的に描いていくことを通して、地域の歴史文化のマスタープランをうまく立案することへつなげていきたいと考えています。



西村 幸夫 教授
NISHIMURA, Yukio
都市計画、
都市保全計画、
都市景観計画

地域の課題を解決し、可能性を広げるコミュニケーションに注目しています。対象は、自治体や企業、NGO・NPO が手掛ける動画や冊子、ウェブサイト、SNS など、さまざまなメディアです。求められるのは、小手先のテクニックではありません。多様なアクターといかに持続可能な関係を形成できるかが鍵となります。パブリック・リレーションズ(Public Relations, PR)を軸に地域のコミュニケーションを「関係性づくり」の観点から掘り下げてみたいと思います。



河 炅珍 准教授
HA, Kyungjin
メディア、
コミュニケーション、
PR(Public Relations)

今までアートとミュージアムを主な対象として調査研究を行ってきましたが、この数年は対象を広げて、アートと科学の垣根を越える「マップ」と、地域を盛り上げるイベントとして開催されてきた「芸術祭」に関する研究も進めています。特に手描きの道案内図や絵図類をひたすら集めたり、ベネチアビエンナーレと日本の地方芸術祭の異同を考えたりしています。研究進捗などについて共有する機会があればうれしく思います。



潘 梦斐 助教
PAN, Mengfei
文化社会学、
近代アジア美術、
ミュージアム・スタディーズ

都市の公園や緑地は、まちや地域の文脈(背景や個性)の継承とともに、人々が集い交流を深めながら地域コミュニティの再構築や再編を促す拠点としての機能が求められるようになってきました。ただ、これまで公園・緑地は、人々が自然や緑と触れ合う場として整備することに主眼が置かれてきたため、計画・設計論の転換が必要です。そこで、長くコミュニティの拠点であった神社の立地や空間形態を参考にしながら新たな方法論について考究しています。



下村 彰男 教授
SHIMOMURA, Akio
風景計画学、造園学、
観光レクリエーション論

里、山、海、川。自然や農山漁村の風景は美しいものです。そして、そこに見え隠れする、自然と応答する人間の営みや土地の知恵は、私たちをさらに楽しませてくれます。観光やまちづくりの対象として、これほど魅力的なものはありませんし、環境との向き合い方を再考する今、農山漁村は都市を新しくデザインするアイデアの宝庫といってよいでしょう。大都市から飛び出して、自然、歴史、文化とともに生活する知恵や技術を学びましょう。



清野 隆 准教授
SEINO, Takashi
コミュニティ・デザイン、
エコロジカル・デモクラシー
のまちづくり

人口減少が進む多くの地方都市がまちを縮小・集積させていくコンパクトシティ政策を掲げていますが、計画が進んだ時に、そのまちは観光的にはどうなっていくのか関心があります。観光の対象というのは神社仏閣や祭りのように地元の人々が担い手となっている場合がほとんどです。住民がまちなかに集められれば、人が減る地域があり、交通や利便施設も減っていきます。その時、観光資源を保全維持していくには新たな方策が求められる気がしています。



十代田 朗 教授
SOSHIRODA, Akira
社会学、観光計画、
都市・地域・国土計画

これまで、まちづくりと観光は、「日常と非日常」「住民と観光客」というように、別々のものとして扱われる傾向にありました。しかし、人々の価値観の多様化やICTの進展によって、ワーケーションや二地域居住といった言葉に代表されるように、同じ人が「まち」と「観光地」を頻繁に行き来・居住することが日常となる時代が現実味を帯びてきました。そのようなニーズにどのように対応すればよいかに興味関心を持っています。



大門 創 准教授
DAIMON, Hajime
都市計画、交通計画

これまでは歴史社会学の立場から都市計画当局と都市住民のコミュニケーションに着目して、戦間期の東京において都市計画がいかにして近代都市を形成してきたのかを研究してきました。現在は、コンクリートという物質に着目し、それが日本の都市化をいかに促してきたのかについて、採掘・流通・劣化という三つの角度から調べています。人とモノの相互作用によって都市がどう生み出され、営まれているのかに関心を注いでいます。



中川 雄大 助手
NAKAGAWA, Yudai
社会学、都市研究



ユネスコでの会合の様子

大学院時代から続く、武力紛争と文化財保護に関する研究

小林…藤岡先生は5月に海外にご出張なさっていましたね。

藤岡…オランダのハーグに行きました。歴史・文化に根ざしたまちづくりとともに、武力紛争と文化遺産保護に関しても研究しているのですが、関連する国際会議に呼んでいただき、参加してきました。

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の条約で、「武力紛争の際の文化財の保護に関する条約」という文化遺産保護の条約があります。博士論文がその条約を主題としたものだった関係で、博士課程を終えて以来、省庁関係者と一緒に条約の年次会合等にあずかって加しています。年次会合は、条約参



加国の政府関係者が集まり、条約の運用について議論する場です。今回は条約が採択されて70周年の記念会合で、条約採択の地であるハーグで開催されました。

石本…どのくらい前から参加されているのですか。

藤岡…年次会合には10年以上参加しています。

小林…具体的にはどのような条約なのですか。

藤岡…万が一武力紛争が起きても——そもそも武力紛争が起きないようにすべきではあるのですが——文化遺産への影響ができる限り軽減されるよう、平時に措置を講じておくことを求める条約です。一般的な文化遺産保護措置だけではなく、軍隊内で文化遺産保護の専門職をおくこと、軍隊内で文化遺産保護の義務について教育することなども定めています。

石本…シリアではパルミラ遺跡が壊されたということもありましたね。

小林…裁判などもあるのですか。

藤岡…西アフリカのマリ共和国にトンブクトゥという世界遺産があるのですが、2012年に武装勢力により破壊されました。その際に、マリ政府が国際刑事裁判所に付託し、攻撃の責任者が文化遺産を意図的に攻撃した罪で9年の禁固刑に問われ損害賠償も決まったという事例があります。ただ、国際刑事裁判所はそれ自体にさまざまな問題もあって、他に同じような例が増えるかという道は険しいというのが現実です。

小林…ご自身の研究テーマが必然的に海外とのつながりが必要としたわけですね。

島・ロードス島におけるルーラルツーリズムがテーマの国際シンポジウムを開催されましたね。

石本…科学研究費助成事業（科研費）による研究を2020年度から始めたのですが、コロナ禍で現地に丸2年行けず調査は難航を極めました。当初は2024年度終了を予定していましたが、科研費の繰り越しができて、2025年度までの研究計画となりました。

小林…石本先生とギリシャとのつながりは何だったのですか。

石本…20代の頃、イスラエルに1年半ほど留学し、帰国途中にギリシャに寄りました。そのときが最初ですね。1週間旅行したのもう日本に帰ろうと思ったのですが、結局ギリシャの大学で博士課程まで進みました。

小林…ギリシャ語は習得が難しいイメージがありますが、マスターするまでどれくらいかかりましたか。

藤岡…そうなんです。もともと私自身は海外志向があつたわけではなく、どちらかといえば日本語が通じる範囲で生きていくだろうと思っていました。でも、大学院に進み興味を持ったテーマを調べていくと文献が英語のものしかなかったのです。

博士後期課程に進学することは、当時はまだ考えていなかったのですが、英語の資料を読んで自分の気になったことを研究しようと思って始めたら、いつの間にか今に至った感じです。

小林…そういうご経緯なのですね。

藤岡…研究テーマが海外か日本かという点では、自分ではそういう区別はほとんど意識してきていないですね。

小林…そうなのですね。観光まちづくりも、国内だから、海外だからということではなく、どちらにも同じような論理があるので、興味を持って海外のことも調べていくうちに、先生は海外のことを研究テーマにしていますね、と、知らない人から見るとそう思われる状況になっているというだけかもしれませんね。

藤岡…その通りですね。

多言語コミュニケーションは想像力でカバー

石本…文献を読む進めるうちに、すべてが英語で書かれたものになってきても、全然不便はないものですか。

藤岡…いや、不便はあります。読み書きのスキルと聞く話すのスキルは勘所がちよっと違うとか、ありますよね。

石本…小林…たしかに違いますね。

藤岡…海外の研究者と話をするときも、アジア人同士ではどうにかなくても、ネイティブ



ヒアリングで訪れた釜山市庁舎のホール。海外都市の市庁舎には都市模型を見かけることもしばしば。庁舎の使い方や空間への意識の違いも面白い

の雑談英語になると、ある意味英語じゃない彼らの言語、と思ったり（笑）。

そんな感じで英語でのコミュニケーションにはやはり苦労もあります。ただ、テーマがあれば話す内容って大体決まるじゃないですか。ですので、話す内容を理解していれば、専門用語と想像力でカバーできる部分が結構ある。論立ての仕方や話し方の癖なども含め、時間が経つにつれわかるようになってくると思いますよね。海外でのコミュニケーションは、ベースになる知識とともに、多方面への想像力を働かせられるかがとても重要なように思います。

石本…そういう意味では、学生にも、英会話

石本…日常生活で不自由がなくなるまでには2年かかりました。

ギリシャ語はロシア語ぐらい難解ともいわれています。ギリシャ語が一番古い欧州言語で、ラテン語や英語に影響したともいわれます。ですから、知らない英語の単語でも、ああいう意味だろうなと想像できることはあります。特に、学術用語は理解できることが多い。

小林…学術用語ならわかる、ということはありますよね。ところで今回、国際シンポジウムを開催されてご苦労なされたことはありましたか。

石本…稲葉さんをはじめ助手の皆さんやCMIスタッフの方々にいろいろとサポートしていただいたので、シンポジウム自体はスムーズに運営でき、ありがたかったです。

ただ、ギリシャからゲストを3人招聘したのですが、航空券やホテルの手配など、旅行会社のような仕事もあってそれが大変でした。

稲葉…滞在中、ゲストにとっては日本の交通事情に合わせて行動するのが大変だったとお聞きしました。

石本…クレタ島もロードス島も電車が通って

いないのです。彼らはシンポジウム前日のオフの日に東京駅丸の内南口から出発するバスツアーを予約していたのですが、満員電車で慣れないので、ホテルのある川崎市の溝口から集合場所までタクシーで行くように伝えました。

朝の通勤時間帯は道路が渋滞するので集合時刻の2時間ぐらい前にホテルを出るよう伝えましたが、1時間前に「これからホテルを出る」という電話があつて。しかもタクシーの運転手が東京駅丸の内南口までの行き方がわからない。バス出発の3分前に着いたそうなんです。でも本人たちは楽しそうにバスから写真を送ってきました（笑）。

その後は時間より前に集合してもらえらうようになったので、だいぶ気を使ってくれたようです。



今年5月におこなわれた国際シンポジウム

教員座談会

海外での活動は、心の中にある境界（ボーダー）を取り払うことから

2022（令和4）年にスタートした「観光まちづくり学部」も3年目を迎え、海外の大学へ留学する学生も増えてきています。

今回は、海外をフィールドとして研究活動を行っている3人の教員に、本学部生も海外へ羽ばたいてほしいとのエールを込めて、海外との交流の醍醐味を語ってもらいました。聞き手は稲葉あや香助手です。

文…小林裕和 観光まちづくり学部教授



石本…いろいろな制度について調べるには、その国の言語で政府の文書をずっと読まざるを得なかったのですか？

藤岡…そうですね。ネットで法規や行政計画を探し出して、機械翻訳も活用しながら読み、ヒアリングでは現地の通訳を入れて細かく話を聞いています。韓国と台湾の場合、主要な法律は英訳が公開されていることも時にはあります。日本の研究者による研究の蓄積も相当にありますので、それも制度や社会状況を理解する大きな助けになります。

対象国にもよりますが、研究主題が定まっていれば、さまざまな資料とヒアリングを通して、知りたいことを知ることはできる時代になっているように思います。あと、行政文書の構成や自治体ホームページの構成は国が違っても似ていますよね。そういう類似性にも「へー」と思いますがやっています。

小林…なるほど。

石本…ずっと読んでいくうちに、何だか面白くなってきますよね。

稲葉…中国語も相当勉強されたのでしょうか。

藤岡…第二外国語でしたが、ほとんど覚えていないですね。語学のための語学は身につかない(笑)。

研究テーマはデジタルが社会や観光に与える影響について

稲葉…小林先生の研究と海外との関わりのきっかけは何ですか。

小林…私は企業勤務と並行して、もう30年以上、デジタルが社会をどう変えていくか、ということテーマに研究活動をしてきました。



人口10万人程度の地方都市のクリスマスマーケットは地元の人のための場

藤岡…ヨーロッパなどと比べると、日本はいろいろなリソースや活動、人の志向が大都市に集中している状況がなお強いように感じています。ドイツに1年留学していた時に、ドイツの地方都市が本当に豊かで、クリスマスの時期になつたら、どんな小さな街でもちゃんとクリスマスマーケットが開かれ、その街のグリューワイン(注…ドイツ発祥の香辛料が入った温かいワイン)のカップがあるという

うのは本当に印象深かったです。

石本…地方に行けば行くほど、すごく個性のある、魅力的な村や町が多いですね。

藤岡…ですね。日本ではイタリアの農村などもよく紹介されていますよね。

石本…ギリシャもやはり地方に行けば行くほど面白いところがたくさんある。地方の中には、結果的に過疎化を阻止しているような



ロードス島、世界遺産「ロードスの中世都市」の一角



クレタ島西部の中世都市「ハニア」旧市街の城壁



国際学会に参加したバレンシア



国際学会に参加したアムステルダム

藤岡先生のお話に共感したことにも関連しますが、今も観光とデジタルのつながりについて調べているのですが、それをテーマとした研究は日本では少なく、必然的に海外の論文を読まざるを得ません。

学会も海外での開催が多く、2022年にスペイン・バレンシア、今年6月にはオランダ・アムステルダムで、観光とテクノロジーやデジタルをテーマとした国際学会が開催されたので発表をしました。発表に当たっては、研究内容をフルペーパーに近い長さのアブストラクト(発表要旨)で投稿し、レフェリー(審査)を受けて発表が受理される、というように手続きが進みました。

稲葉…DX(デジタルトランスフォーメーション)は最近、日本でも話題ですが、日本で研究者層が薄いのは何か理由があるのでしょうか。

小林…情報技術分野の研究は多いのですが、スマートツーリズムという、観光分野にのデジタル領域がまだ薄いのです。

稲葉…観光とデジタルがながっていないのですね。

小林…ようやく観光庁などが主導して各地で実証実験がされています。でも、そもそも観光も含めてデジタル人材自体が足りないといわれています。

拠点が多々あります。そういうところは「観光」というツールを使って、社会経済的にも豊かになっているのは注目に値します。

ギリシャ危機の時、つまり2009年から2018年までの経済危機の時でも、日本人観光客は来なくなりましたが、実はギリシャ観光は右肩上がりに伸びていきました。伝統と歴史を大事にした中世の街並みを再生した観光地などが強かったのです。

それを調べていて、実際に行ってみたら、歴史的な町並みを再生し、新たな価値を付加して観光に活用している。エコツーリズムや、アグリツーリズム、ブルーツーリズムで地域おこしに取り組んでいる。

藤岡…それは、あらかじめそのような政策があったわけではなく、本当にその地元発の取り組みがギリシャのいろいろなところで起きていたのでしょうか。

石本…そうですね。当時ギリシャは国にお金が多かったのですが、EU加盟国なので補助金があった。国によって経済規模は違っても国民総所得(GNI)の約1パーセントの額を必ずEUに拠出するルールになっており、そこから支援を受けたからです。

経済危機の時代にその補助金を地域振興にうまく活用し、歴史的な遺産があるところ、それを徹底的に再生した。だから、10年前に訪れた時には城壁など見た記憶がないところ

出量や水の使用量を測定したりしています。**藤岡**…観光のデジタル先進国はどのあたりなのでしょうか。

小林…欧州は進んでいますね。英国もすごいし、スイスも独自のデジタルマーケティングに取り組んでいます。スペインは国が観光におけるデジタル活用の研究所のような組織も持っています。それぞれ微妙に取り組み分野は違うのですけれど、デジタルを活用することとは共通しています。2024年6月のアムステルダムでの国際学術学会には、欧州全域だけでなく、アフリカからの参加者もいました。

研究テーマは北米日系人の収容の記憶の変容

稲葉…私は、大学生の頃から日本国内の多文化共生に興味があつて、そこから日系ブラジル人の日本の地域社会での共生の問題や、海外日系人と日本とのつながりに興味を持ちました。日系人は、南北アメリカで活動が活発なのですが、言葉の面や収容の歴史の特殊さなどから、特に北米に興味を持ちました。

小林…興味深いですね。

稲葉…自分自身はどちらかといえばインドア派だったので、最初から海外に行きたくて研

ろに、最近では発掘が進み「城壁が出現」していたなど、そういう町がたくさんある。**藤岡**…ギリシャのポテンシャルの高さです(笑)。

海外にも興味を広げて深掘りする

稲葉…学生へのメッセージもお願いできますか。ささほど話が出たように、最初から海外とつながりがなくても、自分にとって一番面白いことを掘り下げるのがいいですね。

藤岡…掘り下げていったら、知らないうちにギリシャに住んでしまった、みたいなことですね(笑)。

石本…私の場合はそうだった(笑)。

小林…海外スタディツアーへの参加が、自分の興味を見つけたら掘り下げたりするきっかけになる、ということもありますね。

藤岡…まずは海外に行ってもらいたいとは思いますが、**稲葉**…最初に海外に出られたのはいつですか。

藤岡…大学3年生の夏休みです。どこだと思えます? エジプトでした。子供の頃からなぜかピラミッドに惹かれていたのです。歴史好きで、ずっと本を読んでいて、最初の海外はピラミッドを見に行くって決めていました。

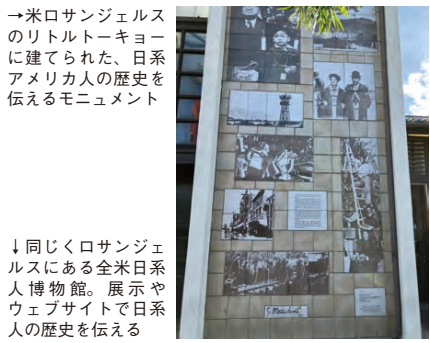
その後、いろいろなところに行くようになって、日本の常識は必ずしも世界の常識ではないことととてもワクワクします。

石本…外国語でのコミュニケーションは度胸の部分かなりありますね。もちろん、語学の勉強も必要だけれど、どんなに勉強していても、度胸を持つてしゃべらないと、いつま

究していたわけではないです。

でもいろいろ調べているうちに、日系人の方の国境を越えたつながりに関心を持ちました。例えば大学院では、世界中の日系人がウェブサイトやデジタルアーカイブを活用すること、というふうな風に日本や他国の日系人社会とのつながりが生まれているのか、といったことを調べていました。そうなることやより重要な史跡や資料はアメリカやカナダにあるので、おのずと海外に目が向きました。

今、取り組んでいる博士論文の研究では、北米日系人の収容の記憶の価値づけが、デジタル化によってどういう風に変わっているかということテーマにしています。



観光まちづくりと海外

稲葉…観光まちづくり学部にはさまざまな分野を専門とする教員がいますが、フィールドワークなどを通じて、分野に共通したテーマの一つがサステナビリティだとも感じました。

学生も、SDGsのようなグローバルスタ

でたつても話せない。**藤岡**…おしゃべりな人ほど語学は伸びる気がします。社交性のある人も。

石本…留学中の話ですが、外国人留学生の中には、読むことはそれほどうまくできないのだけれど、流ちょうに話すことができる人がたくさんいました。聞いていると文法的にはかなり誤りがあるのですが、そのうちほぼ完璧にしゃべれるようになる。

藤岡…度胸ですね。伝わればいい、ということもありますね。

稲葉…日本にいても外国語で話す経験はできます。私は日本にいたが、アメリカ時間の昼、日本の午前3時や4時などに調査のためオンラインでイベントに参加して、昼間は日本の授業やゼミに出るような二重生活が続いたときには大変でした(笑)。

石本…先日学生から、観光まちづくり学部では国内の事例を取り扱うことが多いですが、海外のことも聞きたいですと言われたことがあります。

藤岡…石本先生の観光政策では、海外の事例も取りあげていますよね。

小林…国内、海外にかかわらず、学生の興味に合わせて、多様な学びの選択肢を用意しておくことは大事ですね。

藤岡…国内の事例を学修することも、どこかで海外とつながっていることは多いですね。ですので、海外にも自然に関心を持ってもらいたいです。

稲葉…今日はとても興味深いお話をありがとうございました。



アメリカのマンザナー日系米国人強制収容所跡地での追悼式典のようす



研究クローズアップ

分野を横断するテーマである観光まちづくり。

井門隆夫教授に日本の観光宿泊業について語っていただいた。

（本記事は、國學院大學広報課が2024年5月15日に國學院大學ホームページに掲載されたインタビュー記事を井門隆夫教授が加筆し、再構成したものです）



井門 隆夫（いかど たかお）

1961年、東京都生まれ。上智大学文学部社会学科卒業。（株）日本交通公社、（株）ツーリズム・マーケティング研究所、関西国際大学准教授、高崎経済大学教授を経て現職。専門は、観光経営学、観光マーケティング。

観光宿泊業から見た 日本社会の未来

評価の視点は労働生産性から社会的インパクトへ

インバウンド需要によって日本の宿泊業は安泰……とは、なかなかいかない。既に30年にもわたって、日本の宿泊業の大半を占める中小法人の労働生産性は上がらず、その行く末が懸念されている。そうした中小の宿泊業こそ、地域社会の要であるはずだと考えているのが、井門隆夫・観光まちづくり学部観光まちづくり学科教授だ。インタビューで語られているのは、宿泊業から見た日本社会の未来の話でもある。「資本（所有）」と「運営」を分離せよという、リアリティーに満ちた提案に耳を傾けてみよう。

日本の宿泊業の現況

現在、日本の宿泊業（法人）全体の94%が、資本金5,000万円未満の中小企業です。さらには、宿泊業全体の60%を占めるのが、資本金1,000万円未満の小規模旅館業です。私が着目しているのは、そうした宿泊業の労働生産性Ⅱ従業員1人当たりの付加価値です。

ここで言う付加価値とは、人件費や営業利益、租税公課などの合計ですが、中小の宿泊業においてはその労働生産性が1993年を境に低下していきました。一方、資本金5,000万円以上の大企業は労働生産性を伸ばしつづけています。

地方の小規模旅館業では、もはや従業員を募集しても人が来ないことも珍しくありません。さまざまな国から

の外国人労働者の力を頼ってきましたが、来日される方々の出身国の移り変わりも激しく、いつまで来てくれるのか……というのが正直な状況です。根本的に労働生産性を上げなければ、出身を問わず、働く人がいない産業になっていってしまうのではないかと危惧しています。

それはそれで仕方ないじゃないか、そもそも日本では生産年齢人口（15～64歳）が減少しているのだから、労働生産性の高い産業にシフトしていけばいいのではないか、という議論ももちろん、あると思います。しかし、中小の宿泊業というものは、そのように一概に切り捨てていいものではありません。なぜならば、そうした宿は、地方社会における「ハブ（中核）」を担っているからです。

例えば、地域の水源となっている保安林に実際に手を入れているのは、地元の方々です。里山として整備しているわけですが、そうした地域の中で、中小の宿泊業は、里山のキノコや山菜

「資本（所有）」と「運営」

では、なぜ日本の中小宿泊業では労働生産性が上がらないのか。その大きな問題点の一つが、「資本（所有）」と「運営」が「分離していない」ということです。

宿の運営に当たって、小さな資本しか持っていないのに、大きな借入れをしているというケースが、日本では多く見られます。そうした場合には法人として大きな担保がなければならぬはずなのに、小資本の宿泊業になぜそんなことが可能なのか。それは、日本には個人保証制度があるからです。中小企業が金融機関から融資を受ける場合、経営者が連帯保証人になることができる制度で、中小の宿泊業はこの制度の中で経営者の個人保証、そして不動産等を担保に借入れをして、経営を行ってきました。つまり、旅館などの経営者は、法人が借りている金額に近い額を、個人の金融資産で保証しなければならぬ、というわけです。ここにゆがみが生まれます。法人は赤字でも個人資産は黒字にしておかないといけなくなるのです。融資する金融機関としても、担保である個人資産が黒字ならばバランスが取れている格好となります。

しかしそれは、法人における多額の役員報酬や経営者への不動産賃料といったものが発生しやすくなることを意味します。支えていきたい宿泊業に

対してはあまり良い例の出し方ではありませんが、例えば法人としては赤字である旅館の社長が高級輸入車に乗っているケースさえ見受けられるのは、あれは担保だから、ということもあるのです。しかもこうしたゆがみは、現場を疲弊させていきます。従業員の人件費や営業利益を圧迫しやすく、つまりは労働生産性が低く抑えられてしまう構造的な要因があるのです。

長期的な低迷に陥っている中小宿泊業の現状を変えていくには、一つには

このように一緒にしたになっている「資本（所有）」と「運営」を、分離させていく必要があります。

実際に労働生産性を伸ばさせてきた大企業の中には、資本に関しては外資系の巨大金融グループと提携し、その上で運営を担って全国展開し、成功してきた法人があります。ここで言いたいのは、外資の導入を巡る是非ということではなく、生産性を向上させ得る構造をつくっていくべきだということです。

を採り、宿泊するお客さまに提供したり、加工して商品として売ったりしながら、クマやイノシシ、シカといった動物たちと人の暮らしのあいだのバッファゾーンとしての里山の姿を保ってきた、という側面があります。

そうした地域の宿泊業が地方から消滅してしまつては、里山が、いや地方全体が荒れ果てていく危険性は高まってしまうと、当の業者の方々も問題意識を持っています。つまり、中小の宿泊業は、地域の社会資本でもあるということなのです。



学生たちが里山に分け入り収穫した里山の恵み

ただ、個人保証制度を巡っては近年徐々に改革が進んでいるものの、なにぶん民法改正に伴うルールの変更をしていく領域ですから、一朝一夕に全てを変えていくという話にはなかなかありません。

制度の改革は引き続きの課題として、宿泊業の現場では、どんな改革が可能なのか。私自身がかつて旅行会社勤めていた時の経験や、実際に国内で進められている事例を取り上げながら、考えていきます。



湯の宿も研究フィールド（群馬県法師温泉長寿館）



研究フィールドでもある昔ながらの温泉街（島根県温泉津温泉）



地元建材を活用して建設した隠岐の Entô

日本の中小の宿泊業にとっても、こうした社会的インパクトを中心的な価値とした事業の在り方を、大いに発展させるべきだと私は考えています。海外においては富裕層を宿泊者として想定し、地域の自然環境の保護や、雇用を含めた地域社会への貢献などを目的とした、新エコロッジと呼ぶべき実践例もあります。日本でも、いろいろなかたちを模索できるはずです。

例えば2021年、島根県沖・隠岐諸島の海士町にオープンしたのが、「Entô」です。隠岐ユネスコ世界ジオパークに認定された地の「泊まれる拠点施設」として、注目を浴びています。「Entô」は文字通り「遠島」、古くから遠流Ⅱ島流しの地とされてきた場所において、むしろその「遠さ」にこそ価値を定めて、豊かな自然や生態系を体感できる施設をつくったのです。建築資材としての木材や、宿泊者向けの食材の調達も、地元を重視して行われています。また移住者が多い土地でもあるのですが、海士町複業協同組合が「AMU WORK」という取り組みをしています。「AMU WORKER」と呼ばれる職員になると、例えば夏場は宿泊業、冬は漁業といったように、季節に応じて組織横断的に、人手の足りない所で働くことができるというわ



窓がキャンパスのような Entô の客室

けです。「島留学」という制度もありますし、さまざまなかたちで人々の還流を起こしていった、持続可能な島の社会を築くべく、多くの取り組みが行われているんです。私のゼミの学生も、夏にはみんなで隠岐を訪れています。

宿泊業というのは社会資本です。だからこそ、社会に対してさまざまな貢献の仕方ができるはず。私自身もそうした実験の場に参加しながら、中小の宿泊業の未来を、考えていきたいと思っています。

研究者になるまで

私が日本の中小宿泊業に注力するようになったのは、旅行会社に勤めていた経験が大きく影響しています。大学卒業後、入社したのは1985年のことです。資本金5,000万円未満の中小宿泊業の労働生産性が1993年から下がっていったと書きましたが、その頃の私は国内旅行部という部署に所属しており、まさにその実態を目の当たりにしていました。

ちょうどバブル崩壊の最中でした。その後、日本経済が「失われた30年」などと言われることになるとは思わず、いつか持ち直すだろうと信じながらも、一向に好転することのない状況に向き合っていました。

旅行会社が価格を下げようとするために、宿泊業者の方々にもどうしてもしわ寄せがいつてしまうということになっていきました。すると、宿の方々

から「もっと私たちの『価値』を売ってほしい」という声が届くようになったのです。

いまのように、宿の利用者やインターネットのユーザーが自由にレビューや評価を書き込むような時代が来るはるか前、これからインターネットが普及していく、という時期のことでした。勤めていた旅行会社では、旅館に泊まったお客さまのアンケートを集計、データとして蓄積しながら、単に価格の安さだけを重視するのではなく、きちんとお客さまの満足度の高い宿を紹介していこう、というような地道な取り組みが行われるようになっていきました。

私としても、価格と満足度の因果関係などをデータから考えるような取り組みを進めていたところ、いくつかの宿やホテルからコンサルティングをしてくれないか、というお声掛けを頂くようになりました。それが発端となり、社内起業をしてアンケート分析の専門企業をつくり、やがてそれは研究所として発展していくことになります。そうした会社員としての業務とともに、大学の客員教授もさせていただき、現在の研究者としての道につながってきたということなのです。

2000年代に入り、不良債権化した旅館の事業再生、というようなことにも取り組んできました。全国津々浦々の宿を調査し、事業再生のための計画書を作る、というような仕事を重ねていったのです。

サステナブル投資の活用

中小宿泊業における「資本（所有）」と「運営」の分離、という課題に行き当たったのも、こうした現場での経験あつてのことです。とはいえ、「資本（所有）」と「運営」を巡る民法上の制度改革に、すぐさま全てを託すというわけにもいきません。中小宿泊業を再生するための方法を、さまざまに探っていく必要があります。

実はそのヒントも、旅館の事業再生に取り組むような日々の中で見つかっていました。日本のバブル崩壊を他山の石としていたはずの世界経済もまた、2008年のリーマンショック以降、多大な影響を受けていきました。そうした中、特に欧米が着目していったのが、短期的にキャピタルゲインを得るような資本主義のかたちではない、持続可能（サステナブル）な経済のかたちでした。

例えば、サステナブル投資の手法の一つとして近年注目を浴びている



タイの水上エコロッジ



ベトナムの山岳少数民族が運営するエコロッジ

のが、環境（Environment）・社会（Social）・ガバナンス（Governance）の頭文字をとったESG投資です。上記の3要素に着目した投資であり、同時に財務的なリターンを求め、KPIをマイルストーンとして指標化しています。

サステナブル投資のもう一つの手法として、インパクト投資と呼ばれるものがあります。ここで注目されている「社会的インパクト」というのは、活動や投資を通じて社会や環境に与えていく変化のことを指しているのですが、インパクト投資とは、財務的リターンに加えて社会的リターンを求め、地域社会の維持・再生を目的としていく投資のかたちです。実際に、環境や社会面に大きくポジティブなインパクトを与え、逆にネガティブなインパクトを抑えていく企業活動へ向けた「ポジティブ・インパクト・ファイナンス」といった融資を、銀行が行うようになっています。

秋田県立博物館



秋田県秋田市金足嶋崎字後山 52



詳しくはこちら

しかしながらこの展示室については、設立当初からいくつかの問題が指摘されていた。想定していた以上に未就学児の利用が多く、アイテムの意図を理解してもらいにくいこと

さて、筆者は2022（令和4）年度から体験型展示室である「わくわくたんけん室」の運営に携わっている。この展示室は「他の展示室と有機的にリンクし、子どもから大人まで楽しみながら知的探求心を育むことができ」、「見る・触れる・作る・試す」などの作業を通して郷土を理解してもらうことを目的とした展示室である。「宝箱」と呼ばれるさまざまなアイテムの入った箱を展示室の壁面に設置し、自由に開けてアイテムを体験してもらうとともに、定期的にイベントを行って、全ての世代の人々に博物館を楽しんでもらうことを試みている。開設して今年で20年になるが、広々とした空間と、数々のアイテムや工作の多さから多くの人々に利用していたで

や、宝箱自体が重い上に中身が分からないため、手にとってもらいにくいことなどである。そのため、未就学児を対象とした塗り絵やままごとセットなどを増やした結果「わくわくたんけん室」は「子どもが遊ぶ場所」と認識されることになってしまい、「郷土や展示物と有機的につながる」という理念から乖離していった。展示室の運営についても、壊れ物や刃物などを使用するために職員の常駐を余儀なくされ、学校団体の受け入れが重なる時などは特定の職員に負担がかかっている状態である。

こうした点を徐々に改善し、当初の目的であった「郷土を理解してもらう展示室」とするため、現在ボランティアの人々と協力しながらアイテムや工作の見直しを行っているところである。



榊細工のストラップ作り体験



博物館で作成した紙芝居の読み聞かせ

「郷土を理解してもらう展示室」を目指す

体験型展示室と地域の人々をつなげる

月ごとに実施しているイベントやわくわくたんけん室の運営には、ボランティアに積極的に関わってもらっている。こだわりは「秋田に関連したものを紹介する」ということで、ワラ細工や裂き織り体験などのほか、菅江真澄の書いた昔話を紙芝居にし、博物館や周辺地域の幼稚園・小学校で読み聞かせを行っている。また、親子で体験できるイベントを増やし、今年度からは、より本物に触れてもらうために、榊細工やイタヤ細工などの職人に依頼して、実際のものの作りに近い体験ができるようなワークショップを実施して

いる。博物館の運営は職員だけでなく、NPO法人などの協力が不可欠である。当館のわくわくたんけん室は、展示室と地域をつなぐ場として、職員以外の人々とも連携しながら運営していく場所と考えている。「秋田に関連したものを紹介すること」、「幅広い世代の人に利用してもらうこと」以外には制約を設けず、多くの人の意見を取り入れた展示室として機能するように、館外の人々との話し合いを重ねている。試行錯誤の状況ではあるが、当初の目的であった、展示室と人々とを有機的につなぐ場所として機能するよう、改善をすすめているところである。

文化観光にも言及した改正博物館法が昨年4月に施行されました。今後、博物館には多様な人々が交流するまちづくりの拠点としての役割も求められます。法改正前からこうした活動に取り組んできた博物館を紹介します。

地域と歩む博物館

Vol. 7

地域と連携して秋田のすがたをさぐる

秋田県立博物館 主任学芸専門員 丸谷仁美

はじめに

秋田県立博物館は1975（昭和50）年、秋田市金足地区に設立され、2025年度には開館50周年を迎える総合博物館である。中心市街地から車で30分ほどの距離にあり、交通の便は必ずしもよいとはいえないが、自然豊かな環境の中に立地している。博物館本館から歩いて1キロほどの場所には重要文化財「旧奈良家住宅」もあり、博物館分館として多くの方にご利用いただいている。

このような活動を続けていく中で、自然にボランティアと呼ばれる人々が育っていき、1994（平成6）年、部門の活動を助けけるための「博物館友の会」が発足した。はじめは植物標本を作製・整理する植物標本ボランティアと、化石や鉱物を整理する地質ボランティアのみであったが、その後、古文書整理ボランティア、考古ボランティアなども誕生し、現在も調査・研究のみならず、さまざまな普及活動に協力していただいている。2000（平成12）年度には、より広く博

活発なボランティア活動

当館は設立当初から「郷土秋田の生成と生活文化を解明しつつ、豊かな未来志向に役立つ機能を果たせる」ことを理念とし、「研究の総合化と郷土学の体系化」ということを大きく打ち出した。そのためには地域の人の協力が欠かせず、設立当時から地元の金足地区や、その他の地域のの人々と連携して、石造遺物や民話の採集、植物調査などを行い、調査結果を展示に反映してきた。鹿角地域を皮切りに、特定の地域を定めて3年に1度を目安に自然や歴史・文化などを紹介する地域展を実施したことは総合博物館の強みであるといえる。そして地域展をコンパクトにまとめた巡回展を行い、地域の人々に展示を見てもらうとともに、展示に関連した講座を開き、地元への理解を深めてもらうような企画も行ってきた。

「秋田を知る」ということ

は常設展の大規模なリニューアル事業を行い、今日に至っている。この時新たに開設した体験型展示室の「わくわくたんけん室」は、リニューアル事業の一つの目玉になった。



ボランティアの協力による「軒の山吹」の再現

博物館の活動を援助するボランティア組織である「アイリスの会」が誕生した。アイリスの会は「自らの生涯学習に役立て、県民の歴史と文化に対する理解と関心を深めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的」として組織されている。活動は多岐にわたり、図書整理や各イベントの受付補助などの他、ワラ細工や監染めの体験活動のサポートなどを行っている。

2007（平成19）年からは、江戸時代の紀行家である菅江真澄が記した、金足地区の御鳥喰行事を再現した「軒の山吹」を旧奈良家住宅で行っている。このイベントはある職員の発案から生まれたものであったが、アイリスの会で具体化・実行し、今では山吹の咲く時期の恒例行事となっており、毎年多くの方に旧奈良家住宅を訪れていただいている。

廃校だらけの室戸市

むろと廃校水族館は2018年4月に高知県室戸市室戸岬町の椎名地区に開館した室戸市の指定管理施設である。かつては「室戸市立椎名小学校」であった。2001年3月に3名の卒業を見届けて以降、子どもたちの声が消えた。17年間の空白を経ての開館であった。

室戸市は捕鯨やマグロ漁で栄えたが、200海里問題等で衰退し、人口は右肩下がりが続く。16校あった小学校のうち11校が消え、来年春にはさらにもう1校が歴史を閉じる予定である。

国は耐震基準を満たす校舎の活用を求めている。かつては地方の過疎地の問題であった廃校が、深刻な少子化により、都市部でも次々と増えている。

都市部は人口が多く、廃校施設を運営したい人も利用したい消費者も居る。高齢化・過疎化が深刻な地方においては、利用者どこか運営者すら現れないのが現状だ。

「椎名小学校」は長い間、室戸市役所のHPで利活用の募集がされていた。手を挙げた我々は日本ウミガメ協議会という大阪に事務局があるNPO法人である。室戸市は大型定置網が点在しており、好調な水揚げもあって定置網漁は今も盛んである。太平洋に面した定置網はウミガメを調査・研究する我々には魅力的だった。2003年から調査拠



ウミガメ類で最大となるオサガメも定置網に入ることがある

地域と歩む博物館

廃校を活用した水族館の運営

登録博物館・むろと廃校水族館／館長・学芸員 若月 元樹

点を構えて職員を常駐させており、最初の常駐者が私であった。

しかし、資金力のないNPOがいつまでも室戸に調査員を派遣し、調査を続けることは難しい。協議会内では室戸の調査拠点撤退についての議論も始まっていた。

初代室戸常駐者として、何とか室戸を拠点として残しておけないかと模索した結果、市役所HPの「椎名小学校」の利活用募集を見つけたのである。

廃校利活用の難しさ

今では北海道から沖縄まで、地方議員が多く視察に来る。廃校の利活用の難しさに頭を抱えている地域が多いようだ。

廃校は自治体が運営する博物館の収蔵庫として利用されることもある。多くの博物館が収蔵庫不足で困っている現状はあるが、防虫や湿度管理が必要な収蔵品も多く、無人の「物置」に収蔵できる物は限られる。

さらに、学校は地域住民にとって特別な場所だ。特に地方においては先祖代々の母校であったりするため、利活用に対しては、厳しい意見が相次ぐ。特に他の地域から来た人が運営する場合は、地域住民の感情を逆なでしやすい。しかし、特に地方においては地元で廃校を活用する元気は残っていない。そんな元気があれば、廃校になっていない。

私たちは「廃校水族館」のネーミングでもお叱りを受けた。「廃」という字は「廃れる」に通じる」という言葉は耳にタコができるほど浴びせられた。しかし、「廃れる」という言葉は現実であった。17年放置された校舎は、雨漏りで天井が落ち、シロアリに床や壁が食べられていた。建物の修繕だけで3億5000万円が費やされ、水槽や送水管の設置なども含め、総額5億5000万円使われている。

財源の内訳は国の空き家対策の補助金が約2億円、高知県の観光関連の補助金が約4500万円、起債が約3億円で、室戸市の一般財源から1700万円となっている。起債は過疎対策事業債で過疎地域の市町村が認められた地方債である。

水族館は特殊なハコ

既存の建物を水族館にリノベーションすることは躯体自体や設備に求められる条件が特殊すぎて、ハードルが高い。

躯体に関しては特に2階以上の耐荷重を考慮しなければならない。通常の鉄筋コンクリートの校舎では2階以上に大型水槽を置くことは不可能である。しかし、廃校水族館の2階部分の半分は地面に接しており、大型水槽の設置が可能であった。斜面に校舎が建築されたからできた対応である。ではなぜ斜面に校舎が建てられたのか。

戦後、引き揚げ者やベビーブームの影響で人口が急増。増える子どもに対し、学校も拡張や新設が相次いだ。しかし、食糧難の時代でもあり、地方においては、食糧を生み出す畑を潰して学校を建設することは許されな



リノベーション前の校舎内。雨漏りで天井が落ちていた



斜面に建てられた、リノベーション前の旧椎名小学校。校舎左側の2階が途中から地面に接している

ない、美味しくない、キズで値段が付かない等の理由だ。未利用魚の活用もある。また、地元の生物にこだわっているのも、他の水族館に生物を貸し出したり、譲渡することはあっても、こちらが借り受けることは無い。

これからの博物館はどう稼ぐか

国内の博物館の中で最も恵まれた運営環境であると思われる国立科学博物館。そこがクラウドファンディングを実施したことに大きな衝撃を受けた。知名度も予算も無い地方の小規模館は今後、どうやって運営すればよいのだろうか。

公営博物館が次々と指定管理施設に切り替わっている。志のある組織が指定管理者になれば良いが、現実はどうであろうか。

むろと廃校水族館を運営する我々は志を持って運営しているつもりである。指定管理料は0円。職員の給与や水道光熱費などは入館料とグッズの売り上げから捻出している。

市町村直営や指定管理の博物館からミュージアムショップに置くグッズについての相談がよく来るようになった。「稼ぐ」ことを求められているようだ。

ミュージアムショップのグッズは展示の延長でもある。グッズを通じ、その館の主張を反映させることもできる。地場産品を置くことで地域貢献にもなり得る。

私たちは廃校を謳っているのでグッズの中にオリジナル文具もある。それらの文具はメーカーに発注し、地元の文具店に卸してもらい、そこから購入している。小学校が激減する中、地域から文具店まで無くなってしまうの思いからだ。

その他にも漁師町の老舗かまぼこ店とコラボしたグッズを作ったり、地元で製造されている饅頭などの菓子も取り扱っている。実はこれは珍しいことである。動物園や水族館で販売されている菓子等の多くは、包装紙には施設の名前が書かれているが、県外で製造されている場合が非常に多い。

体験プログラムも多数用意している。家庭科室で魚料理体験、理科室で解剖実習、プールそうじなどの飼育員体験など、小学校の特色をフル活用したプログラムも準備し、修学旅行等の受け入れにも力を入れている。

むろと廃校水族館は入館料やグッズの代金、プログラムの参加費で収

入を得ている。一方で、飼育生物は全てもらい物。イルカなどの大型の生物がおらず、餌代が膨らまない。チラシ・ポスターは一切作らない等、徹底したローコスト運営が黒字経営に貢献している。

施設を継続させる経営手腕が今、博物館には求められている。



オリジナルグッズの一部。県内製造や地元店舗へ卸してもらったりなど、地域貢献にこだわっている

展示生物は突然やってくる

室戸市の近海で獲れた生物を展示している。国内外から生き物を集めて展示する一般的な動物園や水族館とは大きく異なる。通常は展示生物を決めてから、その生物の生態に合わせた水槽の設計を進める。廃校水族館はスペースや予算の制約の中で設置できた水槽で飼育可能な生物を展示する。

ほとんどの近隣の定置網漁を中心とした漁師さんや釣り人から頂くものばかり。だから毎朝何が来るのかわからない。種によっては到着してから慌てる。例えばマンボウの長期飼育に適した水槽は無い。提供して下さった漁師さんの気持ちは尊重し、1週間程度展示し、元気なうちに海に放流する。その他の場合も別の飼育生物との相性なども考えながら入れる水槽を決める。時には展示はせずに海に戻すこともある。頂戴する多くの魚が売れ



イセエビ類は購入すると高値であるが、緑起物なので触角や脚が折れていたりすると分けてもらえる。なお脱皮の度に触覚や脚は少しずつ再生する

むろと廃校水族館



高知県室戸市室戸岬町 533-2

むろと廃校水族館公式 X



詳しくはこちら

博物館情報

入試日程

◆令和7年度(2025年度)一般選抜入試

入試制度		出願期間(消印有効)	試験日	合格発表日
V方式(大学入学共通テスト利用入試)		1/4(土)～1/17(金)	1/18(土) 1/19(日)	2/14(金)
A日程	3教科型	1/4(土)～1/22(水)	2/2(日)	2/14(金)
	最高得点科目重視型		2/3(月)	
	学部学科特色型・英語外部試験利用型		2/4(火)	
B日程		1/4(土)～2/21(金)	3/2(日)	3/12(水)

◆観光まちづくり学部特別選考（V方式・A日程受験者対象）

入試制度	試験日	出願期間（消印有効）	合格発表日	入学手続期間（消印有効）
観光まちづくり学部特別選考	書類選考のみ	1/4(土)～2/21(金)	3/12(水)	3/12(水)～3/19(水)

入試のポイント

1 A日程(2月4日)で「英語外部試験利用型」を新たに導入

英語検定試験のスコアを出願要件として、本学独自の「外国語」試験を免除する入試制度。前期日程から英語検定試験のスコアが活用でき、2科目での受験が可能となるため、より受験しやすくなっている。出願要件として利用可能な英語検定試験の種類および基準は、学部学科によって異なるため、詳細は入学案内や入学試験要項で要確認。

2 観光まちづくり学部特別選考を実施

令和7年度V方式・A日程において、観光まちづくり学部 観光まちづくり学科を受験した者を対象に、以下3点の総合評価によって合否判定を行う入試制度。一般選抜入試の成績だけでなく、学びへの興味・関心や学修意欲も評価。

【選考方法】①志望理由書(700～800字) ②V方式・A日程の成績 ③調査書

入試検定料

応援割（入学検定料割引）を活用して、おトクにチャンスを広げよう！

複数の制度を同時出願した場合、入学検定料が割引になります。下記のケースを参考にしてください。

CASE.1 「共通テスト利用」を中心に受験を検討したい

V方式	+	V方式	+	V方式	=	合計 54,000円 38,000円	16,000円の割引！
-----	---	-----	---	-----	---	-------------------------------------	-------------

CASE.2 「共通テスト利用」に加え、A・B日程でも受験を検討したい

V方式	+	A日程 2/2・3・4のうち1日	=	合計 53,000円 43,000円	10,000円の割引！
-----	---	---------------------	---	-------------------------------------	-------------

CASE.3 A・B日程を中心に「共通テスト利用」での受験も検討したい

V方式	+	A日程 3教科型(2/2)	+	A日程 得意科目重視型(2/3)	=	合計 98,000円 63,000円	25,000円の割引！
-----	---	------------------	---	---------------------	---	-------------------------------------	-------------



國學院大學の応援割！

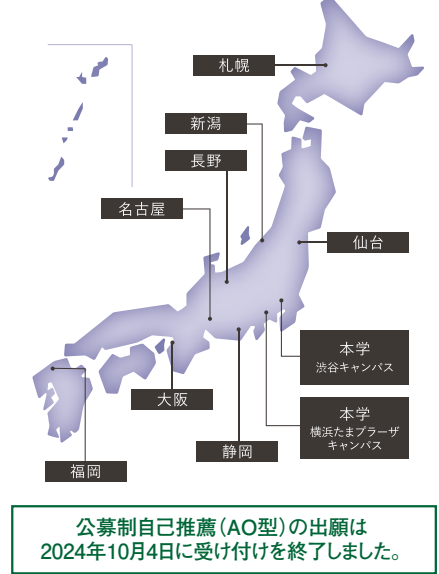
- ◆V方式(大学入学共通テスト利用入試)は、通常検定料**18,000円**が、2出願目以降は1学科(専攻)につき**10,000円**になります。
- ◆A日程は、通常検定料**35,000円**が、2出願目以降は**20,000円**になります。
- ◆V方式(大学入学共通テスト利用入試)とA日程を同時出願する場合も応援割が適用され、その場合の検定料はV方式 **13,000円**+A日程 **30,000円**となり、合計 **43,000円**となります。

試験会場

A日程は東京以外でも受験可能！

自宅に近い場所で安心して受験できます

A日程は本学試験場のほか、地方8会場(札幌、仙台、新潟、長野、静岡、名古屋、大阪、福岡)でも受験可能です。



公募制自己推薦(AO型)の出願は
2024年10月4日に受け付けを終了しました。



観光まちづくり学部
「こくびょん」

観光まちづくり

第4号

発行人 西村 幸夫
編集人 楓 千里
編集 石垣 悟

小林 裕和
椎原 晶子
南雲 勝志
編集協力 相道 なぎさ
(地域マネジメント研究センター)
大隅 一志
(地域マネジメント研究センター)

アートディレクション 大森 慎也
(株式会社光陽社)
デザイン 児玉 陽子
(cota design)

校閲 株式会社ぶれす

発行 2024（令和6）年11月1日

発行所 國學院大學
観光まちづくり学部
〒225-0003
神奈川県横浜市青葉区新石川 3-22-1
電話 045-910-3800
cmi@kokugakuin.ac.jp

印刷所 株式会社光陽社

© 國學院大學 2024
本誌掲載の記事・写真の無断転載及び複写を禁じます。

観光まちづくり学部WEBサイトのご案内

観光まちづくり学部について、ホームページで詳しく紹介しています。また、専任教員が専門分野や学生への期待などを動画で語っています。以下からご覧ください。

観光まちづくり学部
ホームページ



観光まちづくり学部
専任教員動画



観光まちづくり学部公式
X(旧ツイッター)もぜひご
覧ください。学内のイベン
トやゼミや学生の活動を
アップしています。



観光まちづくり学部 GUIDEBOOK 2024 「地域の夢」全ページ公開！

本学部のカリキュラムの詳細や、1期生・2期生による「ゼミや講義」、「インターンシップ体験」、「学生生活」、「海外スタディーツアー」、「観光まちづくりコンテスト受賞」の紹介などを一冊にまとめたガイドブックを、PDFで全ページを公開しています。奨学金などの学びのサポートやたまプラーザキャンパスの施設紹介なども詳しく掲載しています。以下からご覧ください。



※本冊子をPDFでもご覧いただけます。
(現在は第3号掲載中。
最新版は2024年12月上旬掲出予定)



國學院大學の
受験生WEBサイトを
確認しよう！

ここから
アクセス



受験生向けサイトを中心にオンラインでの情報発信を行っています。

動画コンテンツ配信

大学の基本情報や、入試説明、学部学科の学び、模擬授業などを公開中。

バーチャルキャンパス

渋谷・横浜たまプラーザキャンパスを360度でご覧いただけます。